



民俗地理からみた地域の諸相に関する研究

著者	中村 雅俊
発行年	2003-03-31
学位授与機関	関西大学
学位授与番号	34416甲第112号
URL	http://doi.org/10.32286/00000355

(副論文)

民俗地理からみた地域の
諸相に関する研究

中村雅俊

はじめに

この副論文は、本論文で扱った虚空蔵信仰の研究にあたって、筆者の研究方法の基礎をなす方法論を培い、あるいは筆者が地理・歴史・民俗の学際的研究領域を標榜する礎ともなった地域調査を収録することで、本論文においてふれることのできなかつた部分を補完する目的で編まれたものである。

地理学において、また民俗学においても、研究をすすめる上で最も留意すべきことのひとつに、現地調査の重要性をあげることができる。現地に赴き自らの足で歩くことによって文献で得た知識を確認し、あるいは地元の人のお話を傾けることで文字の記録では知り得なかつた貴重な情報に巡り会うことも決して少なくない。

筆者は学位請求論文をまとめるために、虚空蔵菩薩に関する諸々の伝承や資料を求めて全国を歩くことが出来た。それは時には苦しみもともなつたが、それに幾倍もする喜びをもたらしてくれた。

そのような自らの研究対象の地域調査とは別に、地方自治体の要請やあるいは研究団体などの調査にも参加してきた。筆者は主として運輸・交易の部門を担当することが多かったが、村落の調査の場合には年中行事がその村落を知る基準となるので、その調査も幾度も手がけてきた。

筆者の民俗地理学の基礎研究をなす報告書として、ここにはすでに調査報告書が刊行されたものを中心に雑誌の依頼原稿などもあわせて収録した。従って、三田市における調査に関しては、平成十五年四月に市史民俗編が刊行予定で、その中の「村と村をむすぶもの」と題する一章を担当し、すでに原稿を事務局に提出しているが、ここには載せていない。

目次

はじめに

第一章 運輸・交易

第一節 西宮市下大市の運輸・交易

第二節 伊丹市荒牧の運輸・交易

第三節 三田市山田の運輸・交易

第二章 年中行事

第一節 西宮市越水の年中行事

第二節 遠州御前崎の年中行事

第三章 その他

第一節 滋賀県土山町大河原の生業

第二節 池田市細河の生育・婚姻

第三節 居籠神事―京都府相楽郡祝園神社―

第四節 六道参りのオニ

第五節 奥美濃の天狗伝説と宗祇柿

おわりに

五

一一一

三五

五二

六八

七五

九〇

一〇六

一一七

一二一

第一章 運輸・交易

第一節 西宮市下大市の運輸・交易

一 運輸

西国街道 むかしは京街道といった。西国から京へ行く唯一の道だったので、人通りも多かった。これを通らないと、一度大阪の方をまわらないといけなかった。下大市には宿場はなかった。西は夙川の森具という村に宿場があった（今は西宮市屋敷町という）。東は昆陽に二、三軒宿があった。ここには真言宗の昆陽寺がある。

広田からこちら下大市まで家はなく、下大市の村も今の会館がはずれで、あとは田んぼの中を水路にそって街道が武庫川に続いていた。報徳学園のあたりで堤防を超え、そこに髭の渡しがあった。武庫川に橋がかかったのは明治四十年位のこと。甲武橋という。橋は髭の渡しより少し川下になったので、その時に街道も上大市のかかりの所から新しくつけられた。この頃から西国街道という呼び方もするようになった。京街道と西国街道の両方の呼び方をした。

橋が出来ると髭の渡しはなくなり、今では渡しの後も、そこへの昔の道も全くそのおもかげを伝えていない。

髭の渡し 武庫川が仁川と合流するあたりにあった。かつて参勤交替もここを通ったが、船で渡すようになったのは明治になってからである。江戸時代には人足が出て、かついで渡した。人足を出したのは下大市、上大市と段上、向う岸は髭茶屋（ずっと昔に髭の御爺さんが茶屋をしていたという。それ

が村の名になり、渡しの名ともなったようだ）、西昆陽、常松付近からでていた。水が腰まである時と肩までの時では人足賃が違うので、しゃがんで渡して、余計に人足賃をもらたという話を聞いている。

船が出来てからも水がない時は歩いて渡った。水が出たという船頭が行って、干上がった時はやめていた。船頭は下大市、上大市、段上から交替で出た。一人ずつなので、なかなか順がまわってこなかった。アガリ(日役賃)は全部もらえた。船は十人位乗れるもので、四メートルはあった。客が二、三人たまったら出した。どこぞの祭がある時などは人も多いが、普段は少なかった。

船頭を出す村が寄って船をこしらえたので、この村の者は渡し賃が半分でよかった。昆陽寺へ参るのに髭の渡しを使った時、その時分(明治三十年代末)に一銭位にしてもらったので、普通は三銭だったろう。下流にある守部の渡しでは三銭とられた。守部の渡しは髭の渡しがなくなった以後も、もつとあとまであった。

道と道標 門戸を通って甲山へ行く道を門戸道という。門戸からいうとオイチ(下大市)道という。街道と門戸道が分れる所に道標が二つある。道標の位置は昔と変っていない。

(1) 表 日本三躰厄神明王

右 すぐ尼崎大阪(以下埋没)

左 伊丹池田京(同)

左 是ヨリ西宮江 三十(同)

尼崎生魚 上(同)

(2) 表 すぐかぶと山観音

右施主 大阪折屋徳兵衛

ここらの道標は、大阪新町の折屋徳兵衛と、その母や妻が建てたものが多いという。今、その家は新町にない。新田道というのは守部の渡しをさして行く道で、これをずっと行くと尼崎に至る。守部の渡しは甲良橋の下、阪急電鉄の真北にあった。新田道の分れる所に道標がある。

(3) 表 尼崎大阪道

右 すぐ高木今津□

左 右厄神明王道

裏 高木村津高平兵衛

高木の津高平兵衛は今はたえている。八幡神社から高木と樋口へ行く道がある。それぞれ高木道ん樋口道という。高木、樋口からいうとオイチ道となる。ここにも道標がある。

(4) 表 すぐ尼大阪□

右 すぐ尼神明王道

左 西ノ宮宮本八兵衛

村の中の道 下大市のナカミチというのは、街道と門戸道が合う所から八幡さんに行く道で、村の人が通る主な道である。道標もナカミチにそって立っている。ソウレンミチというのは、葬列が墓地へ行く時通る道で、普段もそのように呼んでいる。むかし街道が髭の渡しにかかる所で、大名が渡しを待つ所があった。そこを土下座道といったという。

道のまじわる所をツジという。治兵衛さんとこのツジとか、ヨツツジとかいう。

街道は県道でジャリ道であった。明治時代だと巾五尺位の、人と牛が通る程のものであった。県の印のついた荷車にジャリを積んできて修理していた。村の中の道は自然のジャリ道で、これは村で修理した。

ユリノト橋は、街道と門戸道が合う所の用水にかかっている。用水のセキの名をユリノトという。そのセキイタの名前だが、由来はわからない。イヌイ橋は上大市所属で、ソウレンミチが川を渡る所にある。小字名のイヌイに一ある。中島橋は新田道に属す。

地蔵・行者堂・稲荷 村の入口に地蔵はまつっていない。村の中に高札場があったが、その横に地蔵がある。髭の渡しの向う岸には行者堂というホコラがある。そこには「文化六巳四月山本講」と台石に刻まれた役の行者の石像が祀られている。こちらの堤には渡しの安全のために稲荷を祀っていた。今は上大市へ移してある。大水が出ると、村中の者がでて、マツの木を切って堤防の修理をする。その時、堤防に上大市、下大市、段上、新田の各村の担当区域があった。上大市の区域にその稲荷があったので、上大市がお世話している。

万治元年（一六五八）と元文五年（一七四〇）に大洪水があった。それ以後は、下大市は洪水の被害はない。六甲山は、大正五、六年に砂防工事で植林されるまではハゲ山だった。センゴクズリといって、一日に千石ずれたという所がある。仁川も武庫川も天井川で、川底と土手の間が低いのですぐあふれた。瓦木は明治五年に一回切れた。

そのような川なので、舟運やイカダはなかった。

カタビキ 肩にヒモを掛けて引くカネの車輪の二輪車で、板のはつてあるところはタタミ一畳位であ

る。どこの家にもあって、何でも運んだ。米にすると四、五俵積むことができた。タワラを真中にひとつねかして、あとは両側からたてかけて積む。

牛車 カタビキと同じような二輪車で、ひとまわり大きい。ひかすのは牛で、馬は使わなかった。下大市で十軒位が持っていた。米とか下肥とか目方の重い物は何でも牛車を使った。車輪ははじめカネ輪だったが、あとでゴム輪になった。牛車のない家を持っている家から借りることはなく、ない家ではカタビキを使った。牛車で遠くまで行くには、牛をひく者とカジをとる者で、扱うのに人手が二人必要であった。

下大市で牛が一番多かったのは戦争中で十七頭いた。戦後は百姓する家が減って、昭和三十年代にいなくなってしまうた。牛を飼うのは大層なことで、毎朝晩にロウズを飲ませ、昼は草を刈ってきて、ワラを細かく切つてあたえた。ロウズというのは、湯をたいてそこに牛の好きな穀類のカスや、野菜の残り物をまぜたものである。

牛を売り買いするバクロウがいた。下大市にも昭和のはじめに文吉さんという人がいた。宝塚の蔵人という所にもいた。文吉さんが死んでからは樋口新田の吉成という人がするようになった。家によっては直接市に出かけることもあった。石橋の麻田や豊中の岡に市があった。農家にとって牛を買うのは大変なことで、ごつつう大金であった。メスのチュウウシが良い。二才になって仕事の出来る牛である。

ワウシは三田や有馬郡、氷上郡で生れた小牛を、一年位たって市に出し、それを和歌山の人が買って紀州の方へ連れて行って仕込む。小さい牛に石を引かして力をつける。一度紀州にいかんと、よう

仕込まんということをやった。

戦争中に、よく牛泥棒が来て牛をとられた。殺して肉をとって行く。下大市で二、三軒とられた。百姓にはどうしても必要なので、タノモシを三百円で買ってもろて岡の市に買いに行った。それは終戦時分のことで、その時分は三百円で牛を買って、まだ残ったお金で御飯を食べるだけ余りがあった。五十円のタノモシはしんどいので、三十円のタノモシを十で三百円貸してもらった。牛泥棒の他に、蔵泥棒もよくあつた。蔵にキリで穴をあけて中の衣類をとって行く。自治会で夜どおし夜警をしたこともある。

戦後の二十四、五年頃、三千円位で牛を買った。その牛は良い牛で大きくなったので、二、三年後バクロウが一万五千円で買ってくれた。人がびっくりする程もうかった。耕耘機が入って不用になったので手ばなした。

パクロウから買った時、たまたま妊娠しておれば子牛を生ますことはあつたが、わざわざかけてまで子牛を生ますことはなかった。子牛でもメウシの方が値が高いが、使いやすからオスの方がゴシタである。

馬 馬は五十年程前に、ほんの一時三、四年位二頭いただけである。牛車の牛のかわりに馬を使うと道が早いから、家の荷物ではなく、よその荷物を運んでもうけをしようという時は倍から早いのである。田んぼの仕事は牛の方が良い。扱いやすくて上手にきれいに出来る。馬は早い扱いはにくい。

西国街道には馬や牛の水飲み場はなかった。川からどこでも水をくめた。広田の青年会場の横にあった水飲み場は新しいもので、水道が出来てから青年会が奉仕して作った。下大市にはなかった。

自転車 大正五年頃からあったが、商売屋をのぞくと百姓で持っていたのは三台くらいだった。一

二 交易

米 今では、下大市で売るために作っているのは十俵そこそこになってしまった。各家でそれぞれ出している。食管法以前は、米仲買が買いに来た。土地の人もあったし、また酒造業者が買いにくることもよくあった。自分で食べる以外は仲買に出していた。米と一緒に、ソラマメなども買ってくれた。アオタシ アオモノは反で買うアオタシという人がいて、畑を一反なんぼで買って刈り取り出荷もその人がすべて手配してくれた。夏はネギ、コイモ、冬はハウレンソウである。コイモは一株いくらという計算で何日までに土地をあけてくれという契約をした。アオタシは土地の人もあったし、西宮や大阪の人もあった。女の人を五、六人やとい、順に刈りとりカマスにつめて市場へ出す。今でも門戸ではネギをしている。下大市も昭和三十年頃まではアオモノをよく作った。その時は地で買いに来てくれたが、今では五、六軒しか作っておらず土地が狭いので地で買ってくれない。家でぬいて西宮の中央市場へもっていく。

甲東青物市場 大正のおわり頃街道に面した宇五反田のうちに、市場の倉庫が立っていた。そのころ西宮の青物西市場の責任者だったダイクマ（高木九次郎）が発起人となって、下大市の信用購売組合の理事長とダイウメ商店の豊吉さんが加わってはじめて市場で、甲東青物市場といった。ダイクマの高木さんが下大市の出身で、盛んにつくっていたナスビナエを集荷して神戸の中央市場に売ることを考

えてはじめた。三人が株をつのって、たいていの農家は五株や十株は持っていた。甲東中からアオモノを集めた。中でも当時は下大市が作る量も多かった。

夕方から市を売り出して、荷造りして翌朝の神戸の市に出した。ダイウメが売り子になって主にナスビナエ、キュウリを売った。買い手は神戸から二、三人と、このあたりの人が四、五人いた。七、八人よって買い手になった。

荷物は牛車でもって神戸へ運んだ。直径七十センチに深さ七十センチ位のバナナカゴにナスビなどを入れたのを二十二、三杯積んだ。葺合の市場からその先の荷の買い手の店まで配達して、牛車のカジモチとハナモチと二人で往復三円もらえた。その時分、神戸水道へ働きにいった時、一番安い時が四十三銭、高い時でも五十一銭だったので三円というのは多い。

この市場は戦争のはじまる頃につぶれた。つぶれた原因は、欠損が多くあまりもうけがなかったからで、青物を作る農家が減ったことや、市場を通さずに直接に売る人があったこと、買い手に貸したお金が回収できないなどが重なったらしい。

下肥 コエはとくに冬の間の裏作にいった。普段は五日か一週間に一度くみにいくが、寒の内や寒い時は田んぼ仕事ができないので毎日くみにいく。夏場も戦中戦後は肥料がないので取りにいった。田んぼの水をぬいてカラカラにしておいて、肥料の車を水の取り入れ口のそばまでもってきて、水を入れながらコエもボチボチとまぜてやった。

西宮の東の浜にあった紡績工場のをよく運んできた。下大市から六キロ程あった。この紡績工場が出来るまではこのあたりは副業に綿をつくっていた。田んぼを三町も四町も作っている家ではシブロ

クで米が六に綿が四という位であった。布を織って、キレをよせる人があって大阪などへ売りさばいた。ところが紡績が出来て、この副業がだめになり綿をやめてナスビナエを作るようになった。

くみにいくのは牛車やら、テンビンボウでタンゴを肩に荷のうてくる人もあった。牛車に積むのは、讐油ダルの四斗ダルのカガミをぬいて、それを八つよけいに積む時は十積む。大正十〜十五年頃で、タル一本に八錢払った。紡績の方に、請け負っているコエヤという人がいて差配していた。それで生活する人がいた。こつちがくんでつめて運んでくる。

終戦時分には神戸の住吉まで取りに行った。こちらには商売人のコエヤがいて、そこまでいくとタルにつめてくれた。こつちはじつとしていたらよいが、一本につき二十錢払う。戦後配給制のあいだは肥料が量りなかった。住吉の方から売りにくる人もあったが高かった。百姓のタンゴは一斗五升だが、コエヤのは二斗はいる。昭和三十五年に配給が解除になった。その時までくみにいっていた。その頃だと一タル二百〜三百円だった。それ以後は化学肥料のいわゆるキンピ（金肥）を使うようになった。

終戦まではフロを落とした水を田にかけていた。それをフロサキといった。その時分は近所の三軒位が交替でフロをたてていた。たくさんの人が使うのでアラで一杯になる。アロの水をオケに受けて、翌朝すくって運んだ。それ位、コエケのあるものを大切にしたものだ。

ここらは山が遠いので、クキギを拾いに行くことはなかったし、背負う道具もなかった。昔は麦ワラや稲ワラでフロやカマドをたいた。昭和四十年からこつち麦ワラがなくなつたので、三田から車一台いくらでタキギを売りにきたのを買って使った。

縁日　ここの八幡神社の祭には店はでない。また、市がたつということもなかった。

店　明治頃、伊丹の小西白雪酒造から西宮の宮水をくみに、タルの長いのを横にしてつけた四輪の牛車（ウシクルマ）が西国街道を往来していた。その人達が下大市で一服して、昼ごはんをヒノトモ商店で食べるが多かった。ヒノトモというのは樋口からきた田中友造という人がはじめたからで、一杯飲み屋と子供のチンにあるものを売った。

ダイウメは松本梅吉（オイチのウメキチさん）が明治十年頃からはじめたもので、百姓道具や葬式道具を売った。米をつく水車も持っていた。

ヒノトモもダイウメもよそから入って来た人で、はじめはカブナシであったがあとでカブを買った。下大市には三十六株半あって、一軒で一株で、半株は村のあるきをしていた人が持っていた。この三十六株半というのは江戸時代からである。家が没落して株にあきが出来ると、その株を半分ずつにして二軒で一株を持つこともあった。分家やよそから入って来た人も持てた。新しくカブニン（株人）になるとカブブルマイということをした。

大正時分、米仲買いに手を出してひっそくする家がちよいちよいあった。

大正二年頃に、直井商店というオマンヤができた。神戸から来た人で、生れば四国である。

やはり大正時分に、紀州の有田郡から来たカジヤが店を出した。直井さんの親類にあたる人で、頼ってやってきた。ここでカジヤをすると甲東中から仕事がくる。小笠原兵太郎さんが当代で今もカジヤをしている。

大正末頃に、福井県の朝倉から来た人がウスヤをはじめた。農道具やヒキウス（ノウス）を売る。こ

の人ははじめの内、カマの修繕によくここへ来ていたのが住みついたのである。カジヤはカネ類ばかりさわり、ウスヤは木製品もさわるという違いがある。

カシンヤ(菓子屋)もできたが、じきにつぶれた。終戦後に店がふえた。

行商人 魚は荷のうて売りにきた。大正から終戦まで尼崎の大庄や西宮の鳴尾、神戸の深江からきた。一日三回位網をあげるのを買って毎日来ていた。「イワシのとれとれ」と声をあげて、イワシやコアジを売り歩いた。

西宮のトサツ場が近いので、そこで仕入れた因を売りにくる人がいた。こっちへきて、なんぼわけてくれというと、切って計って売る。毎日は食べないが、すき焼きなどちよくちよくは食べた。ずっと前には、肉のことをノツキヤドクといった。意味はわからない。「ノツキヤドク、カノコの上等(油味のまじっている肉)」という売りことばで歩いた。今はカシワが安くて肉が高いが、昔はカシワが高くて肉が安かった。農家では牛が一番の宝なので、カシワは食べても肉は食べない家が多く。カシワの半値位で買えた。お客がある時は、肉はあかんカシワにせないかんといった。たいていの家ではニワトリを自家用にと十数羽飼っていた。ひとつの鳥が十二、三個のタマゴを出す。エサの粉米はあるので、トリを飼っておいて、客のある時はそれをつぶす。肉は家の者だけで寒い時にぬくもろうかという時に食べた。

高野ドウフ、メザシ、シヤケなどの干物を売る人が何人かいた。乾物は尼崎の浜手の方から来た。

トウフは毎日リンを鳴らしてやって来た。

売菓は、富山と奈良の御所ともう一人奈良とで三軒から来て、今も続いている。富山からは年二回、

奈良からは年一回まわってくる。薬屋も田んぼを作っているので農閑期につめかえて帰る。最近では一つか二つしか飲んでいないことが多い。

輪島塗の行商はこなかった。

買物は、電車が出来るまでは西宮へ、出来てからは大阪へ出るようになった。

かしかり 牛を一日借りると、牛の朝ゴハンを出し、返す時に昼、晩の代として麦を一、二升たいて牛の礼に行く。そして、一日借りたら二日のテガエシをした。

三 その他

娯楽 宝塚の歌劇や西宮の芝居小屋を見に行くのが楽しみだった。西宮にはカフェ、居酒屋（コップ酒を飲むくらい）、遊郭もあったが、月曜―土曜は毎晩二時間、習字、ソロバンなどを青年会で勉強した。日曜は休みだが、その日も百人一首をしたり青年会に寄ることが多かった。

青年会が出来るまでは、トバクに手を出す者もあった。それで大正元年に青年会が出来て、お寺の敷地に会場を建てた。その時高野山へ頼みに行った。

かわいそうだったのは、新婚の人でも晩の七―九時の二時間はここへ出席していたことである。早く帰ろうとすると、みんなからひやかされた。

マメシバイといって旅芸人が来て小屋がけして興行した。ソラマメが出来る時分は、田植えと麦刈りの合間で、ソラマメをむしってしまった後の田にムシロを敷いて、ムシロ小屋を建てた。ソラマメ

の頃来るのでマメシバイという。播磨屋団十郎というような座長が役者を十五、六人、全部よすと二十人程の一座をひきいて来た。一座を何日間と買って買いとる人があった。下大市でも一部の人が買って木戸銭を取ってもうけた。一座の役者が東西屋になって甲東中をふれまわった。たいがい毎年来ていた。戦前のことである。

正月には、シシマイやイワイオドリ、サンバソウなどがきた。ツツミを打ったり、片足をあげて舞うたりしたが、これらは明治のことでやがて来なくなった。

ヌケマイリ お伊勢さんへ参るのは、親にだまってい。言うていったらあかんという。それでヌケマイリといった。一生に一度、二十歳までくらいの者が十人あとさきの仲間で出かけた。一週間だったがのちには五日間になり、昭和のはじめ頃まであった。中村さんの時が最後だった。

旧四月三日は神武天皇祭で、その晩は青年会の会場で徹夜した。前に伊勢参宮した者がよって御馳走してデダチしてくれる。そして四日の朝そのまま伊勢へ行く。その時に村の出口一八幡神社か西宮から汽車で行くなら停車場まで送ってくれた。

旅費は借りていく。あってもなくても皆と一緒に金があるとこの家をねらって借りる。はじめて歩いていく旅して、ワイワイと楽しかった。着物にハオリ、のちには青年団の団服を着た。古い人は、守部の渡しから尼崎まで歩いて国鉄で大阪へ出て、そこから歩いて奈良へ出た。あとには、門戸から阪急電車でそのまま乗りついで奈良まで電車で行き、そこから歩いた。それで日数が、一週間かかっていたのが五日間になった。いきの道は色々であった。

その時分は春になると、伊勢参り道中といって播州、丹波、河内から伊勢参りの客ばかりなので、

どの道中ということを考えなくても、いくらでも人のあとについていけばよかった。どこを通っていたか詳しくはわからない。下大市を朝にでて奈良で泊る。奈良、長谷、アオ、六軒茶屋、そして伊勢山田に二泊の順に宿をする。これも、その時々で名張に泊ることもあった。宿はみな決っている。前に参った人が、どこで泊れよと言ってくれるし、一番最初、長谷で泊る時にようけ宿からノボリを持って迎えにくる。「どうぞお泊り」といって「摂津のオイチの方」と向うから声をかけてくる。摂津の者は「摂津サン」といわれた。宿が次の宿へと電話をしてくれる。伊勢山田では紀伊国屋が常宿だった。

内宮、外宮は同じ日に参る。その日はミヤイリといって村の総代のうちに電報を打つ。そうすると村中休みになる。着いた日に参る。朝熊山には参らなかつた。

伊勢参りには、身を清めていくということはなかつた。むしろエエトコで遊んで身をよごすようなことだった。帰りは大津、京都まわりの汽車で帰ってくる。村の方では、帰って来る日はサカムカエといつて村中休む。アルキという人が「今日は伊勢参りのサカムカエだっせ」と言ってふれてまわり、村中で出迎えてくれる。親戚とか友達七、八人は武庫川の守部の渡しまで来てくれ、村の人は八幡さんまで迎えてくれる。村から宮さんまで伊勢音頭を歌っていく。そこでカントダキのたき出しがあり酒を飲み、また音頭を歌う。

家に戻ると、お祝いやといつて近い親類が皆寄っている。それだけお伊勢さんが大事だった。親が知らん間に行くのが、その信心が良いといわれた。お伊勢さんは女の神さんなので、だからヌケマイリは男ばかりである。

伊勢参りに出ている間に、ルスママイといって親戚が家にもってくる。そこへさしてミヤゲを持っていく。伊勢ガツパや煙草入れなどであった。その日のうちに、伊勢へ行くのに借りた金を返さないといけない。

次の日から青年会の席で、每晚その旅行の話を聞かせる。頭がいたくなる程何度も聞かされた。行者参り 大峯へも参った。男は一度は行者参りをせなあかんといった。村の行者講の親方が先達になって連れていく。洞川で身を清めてからオヤマする。吉野まで電車で行き蔵王堂のキゾウ院で泊り、いきか帰りに高野山に寄る。

行場の中にノゾキという所がある。下をのぞくと千切の谷底で、そこに山師という人がいて、後ろから足をもつて体を空中に押し出し「親に孝行せん者は、ここからつき落すぞ」という。「へーしませす」といわなしゃない。皆これにまいてしまふ。こわかった。

帰りに大阪の天王寺さんにお参りしたら、大峯で身を清めて戻ってきたさかい、神さんと同じように思って、大阪の人が、みんなしゃがんでまたげてくれという。お経をあげもつて「南無神変大菩薩」といながらその上をまたげて通った。魔よけになるという。

お札売りは出雲の方からよく来た。姫路の書写山からも来た。

宅地開発 阪急電車(いまの今津線)がつく時、地主には話があった。門戸の停留所がもつとカミへいくはずだったが、田の値段が上るので、駅を寄付して下大市の方へもつてきたという。神戸線がつく時にも、このあたりまで測量に来た。その時分は国や大きな会社がすることは、反対も賛成することもなく百姓はおとなしいものだった。

電車がついて甲東園が大きく変わった。一人の人が大きな土地を持っていたので住宅地になった。門戸の駅の西は、昭和十年頃に門戸荘ができた。駅の東側は昭和三十年から住宅ができた。それ以後ズンズン変わった。前は田畑いれて五十町あったが、今では十五町ほどである。明治の頃は下大市の者で土地持ちは十軒程のもので、他は下大市以外の人が持っている所を小作していた。そういう土地が昭和三十年から売りに出された。

農地法で、二十四年間は売ることが出来なかった。その間、政府や公共地主に売る時でも元の地主に返してから売るというように決まっていた。昭和二十年に終戦、二十一年十一月から農地の買収の書類がまわりはじめ、二十二年は一番盛んに行われた。その期限が切れるということもあって、土地は不動産であるはずなのに、商品化して値さえよかったら売ろうという風になってきた。

話者 中村敏雄氏 明治四十年生。

第二節 伊丹市荒巻の運輸・交易

一 運輸

運搬具 荒巻の村では、戦前、農作業などで物を運ぶ時には、リヤカー、カタビキ、そして少し丈夫なもので牛車、馬力などを使っていた。

もちろん田圃へ出入りするのは畦ばかりなので、何とかカタビキの通るような所からは、あとは肩で運ばなければならなかった。

竹や棒のようなに、直接、肩に乗せて運ぶようなものもあったが、まとめて持ちにくいようなものはサラカゴなどに入れて、それをテンビンボウで持ち上げて肩で運んだ。

戦後には一輪車が出来た

テンビンボウ 普通はボウといった。「ボウで担え」というように言った。長さは決まっていて、あんまり長短はなかった。一間ほど、つまり一メートル五〇から八〇センチ位のもので、普通のまるっぽの棒ではなく、肩あたりが良いように平たくなっている。テンビンボウを使うのは、一人で前後に荷をつけて運べるようなものしか運ばないので、ボウがしなるようにする。

ここらあたりは植木の販売をやりますので、ちょっと大きい植木を運ぶ時には、丸棒の檜の木のもので使って運んだ。そして植木の場合には、二点掛けとか三点掛けとかいって、一つの所を支点にして四人とかで力を寄せて、ボウ（棒）を肩で上げる。ちょうどウインチのような仕事をしたから、相

当重いものでもあげた。だから、植木に使うボウには長さも色々あったし、このボウは、土を突き堅めるツキボウにも兼ねて使ったので、だから長いのは相当長くて一間マナカ位のもあった。樫の棒で、棒そのものも重かった。一間マナカというのは、一間半のことである。

テンビンボウは買って来るが、植木用に使うボウは山で切ってきて皮だけむいて使う。

テンビンボウは池田で買って来た。ほかの金物なども、ほとんど池田で揃えた。伊丹には、昔から仏具関係の商売人がいなかったもので、葬式の時にも、池田で買い揃えてリヤカーで運んできた。その道を「池田道」といつていた。そんな関係で普段でも買物は池田にいくと揃う。今、電報局になっている所にイトワ百貨店というのがあって、我々子供の時分に池田に連れて行ってもらうのが楽しみだった。武庫川を渡って池田の栄町のあたりにチハラという古い仏壇屋さんがあって、この通りで葬式の関係のものが全部揃った。棺も買った。そんな習慣で、このあたりでは買物は池田へ行く。植木のハサミも、古くからの金物屋があって良く切れると評判だった。農道具やロープもそこで買った。

テンビンボウは家に三本や四本はあった。テンビンボウの両端にはそれぞれ鉾が二本打ってあって、その間にカゴをかけた。

テンビンボウはよくしならないといけない。材質はヒノキだったかと思う。物をこぼさないように運ぶには、歩き方にコツがあった。

畠などの水掛けも、昔はホースではなく、タンゴに水を入れてテンビンボウで運んで水掛けをしたものだ。その時に使うテンビンボウは、シナリの良いボウを使うとか、テンビンボウにも何種類かあった。

タンゴを担ぐときは、水を汲むシャクの柄をテンビンボウを担ぐ反対側の肩に担ぐようにして支えにした。ボウの真ん中をかつがないで、少し支点が自分より後ろになるようにして、右肩だけでなく左肩にも重さが分散するようにした。少し荷が浮くようにした。

ボウで運ぶものは、カゴ、フンゴ、タンゴなどに入れる。

カゴにも幾種類かあって、サラカゴ（皿カゴ）というのは、竹で編んだ物で、ひと纏めに出来ないものをそこに積んで、それをテンビンボウで持ち上げて肩で運ぶ。

サラカゴは土や砂などを運ぶ。竹を編んだ皿状のカゴで、田植の時の苗もサラカゴで運んだ。苗はカブタを外にして積み上げると沢山積むことが出来た。

スイカカゴといって、サラカゴと同様に直径は八〇センチ位、マナカ（半間・九〇センチ）まではない。直径は同じだが深さがある。竹で編んでいてカゴメの形である。

竹藪のある地域に入る所では、もう少し小さいこぼつと深いカゴがあった。この辺りでは豊中方面で見たが、竹藪に入るのに便利な形をしたものだった。荒牧には、竹藪はお宮さんにしかないこのカゴを使うことはなかった。

フンゴは、畳のようにワラで編んであって、その端を集めて底にし、さらに縄でカゴメのように編んで底を補強してある。細かいものでも入る。直径は九〇センチ位、深さは八〇センチ位のものである。便利の良いもので使い途も多かった。

フンゴは稲刈りの時にモミやモミガラを入れたりもした。稲コキしたモミを道のあるところまで運ぶのに、一人では重たいので二人で真ん中にフンゴをつけてボウの両端を二人で担う。そういう使い

方もする。田圃から畦を使って道まで、カタビキのある所までそうして運んだ。背負い 背負うことはあまりなかった。

頭上運搬 この村では頭にのせて運ぶことはなかった。

カタビキ カタビキは長さは二間はある。大八車というのがここらでカタビキというてるものやと思います。ここらはダイハチということはいわなかった。車輪が二つついていて、鉄車だったが戦後タイヤがはやってきた。鉄車はちよつと石があつても当たると重いので、鉄車をはずしてタイヤをつけるようになった。それは戦後のことで戦前は鉄車だった。前にはヒキテがあつて握りやすいように少し細くなっている。

カタビキには前に横棒があるのと無いのがあつたが、荒巻では横棒の無いのが多かつたように思う。重いときには横に紐をつけて二人びきとかケツから押ししたりしたこともある。

普通の状態では一人で引けるだけの荷を積んだ。米の供出の時も、カタビキに積んで自動車の着く所に運んだ。米にしたら一〇俵位は積んだ。かなり丈夫なものであつた。一〇俵積むと一人では無理であつた。俵を横にちよつと積める。カタビキの幅は一番ソトノリやったら九〇から一〇〇センチ、ちよつと俵を横に積めた。しかしコマの所は横に俵を積むことは出来ないのです、そこは縦にして積むようにしていた。

重い時は、これを牛に牽かせることもあつた。カタビキのちよつと真ん中あたりに、バンセンのよなもので引っかける金具があつて、それを牛の鞍に結びつけた。どの家でも百姓の家ではどこでもカタビキはあつた。

それと、もうすこし丈夫なやつで牛車というのがあったが、これはある家とない家もあった。

牛車 牛車ははじめから牛に牽かせるように作ってあるので、カタビキよりはうんと丈夫である。鉄車の幅も広く、骨組みもカタビキより一回り丈夫である。カタビキの何倍もの荷物を積むことが出来た。二輪である。使う牛は農耕の牛を使う。

馬力 馬力は四輪で、前の車輪が小さい。重量運搬用であった。牛車よりさらに丈夫で、牽引する牛も骨格の丈夫な牛で、農耕に使う牛では持たない。馬力は運送業に使う。遠くまで植木を運ぶには馬力を使った。相当大的な木でも馬力に積んで運んだ。

夜中とかなんかに提灯を吊って、大きな木だと馬力からドンと跳ねて危ないので、車の往来の少ない時間にといいことで夜中に行く。植木の職人さんが来るよりうんと早く目的地に着いて待っている。目的地に着くと鞍はずして待っていたものだ。自動車の数は今と比べたら少なかったが、路面電車（阪神電車の国道二号線の路面電車）なども走っていたので、行く先によって夜中の一時とか三時に出ました。植木は夜に荷積みをしておいた。

夜中に運ぶのは交通量と、職人さんが向こうに着く前に行くという意味もあった。

御者は一人で、前とか後ろとかに提灯をつけて行った。

戦前には、荒巻では四軒ほどの家がこの仕事をしていた。

帰りは御者は寝ていても牛が道を知っていて荒巻まで戻って来ることが出来た。牛は賢いので、道を覚えたいいた。ところが、御者の人が寝てしまったために、本当なら荒巻のナカミチを来るべき所を、その牛がバクロに連れてこられてきた道で急に曲がったので、馬力ともども川に落ちてしまい御者の

人が亡くなったことがあった。昔の橋は欄干がなかったもので、少し小さく回ると転落した。もう一つの橋を渡らないといけなかったのに、もし起きていれば、なんということはなかったのか。

牛はオツポでつかいます。普段の農作業で外に出した時も帰りは綱を丸めて鞍に掛けてやると、勝手にテクテクと自分の家まで入ってくる。開いていたら鞍をつけたままで、牛小屋まで黙って入る。田圃への行きしなは鼻をもつて連れて行かないと分らないが、帰りは大丈夫である。

馬力は副業としてしていた。植木で松などの大きな木を大阪やとか芦屋へ運ぶ。

馬力を索く牛は体格の良い牛で、農耕にも使う。

牛は普通はバクロが小さい牛を持ってきて、農耕に使いながら一年とか二年とか育てて、またバクロが持つて来る小さい牛と交換して、なんぼか金を貰う。だから、たまにはまだ鞍をかけたことのないような小さな牛が来ることもある。

普通には、牛のエサはワラに時に麦をまぜるが、馬力を索く牛は普段から麦をたべさせている。馬力の駄賃は幾らくらいかは、子供時分のことなので知らない。

昔は肥料と言うと下肥で、それを取りに芦屋や西宮に行った。神戸あたりまで行った。神崎あたりによく行った。私の所でも、戦後下肥を取りに行くために古い馬力を買った。川西にも行った。取り合いです。つてを頼ってたのむ。また、下肥を集めるのを仕事にしている人もあった。向こうで取ってなんぼかもろて、こっちで麦にかけてそれでまたなんぼかもろてして、その収入で山を買った人もあった。下肥を運んで来て溜めておく壺をわざわざ掘ってコンクリで作りました。それをノツボといっていた。コンクリのないときは、木枠で土が崩れないようにした。そこに、よく子供がはまったし、

ベコウシを飼っていた時に、そこにはまっつてしまったこともあった。その時はアゲン（引き上げる）のに往生した。つかまるところがないもんで。わたしらの子供の時分には、あまりノツボは記憶にな
いが、終戦後に道端に穴を掘って沢山作った。今も残っているが、薄い鉄板を張ってある。

どうして戦前は下肥を使わなかったのかというと、ニシンを株がうわっている間に刺したりしていた。昔の米はおいしかったと思う。植木をしていた時は、大豆の豆カスの板が肥料屋にあつて、それを精米所で粉碎してもらって、植木の間にまいた。一メートル位の板。稲には牛小屋の藁にフンをしたものを田圃の真ん中に積んだりしたので、土そのものはよく肥えていた。それが、牛の藁はあつたが、それ以外の肥料が一時ものすごく枯渇してきて、下肥をまくようになった。今思うと実に不衛生なことではあつた。素足で、せいぜい足袋をはくくらいのことであつた。自分はまだ中学生くらいだったが、コエツボから田圃まで父親と真ん中で受渡して運んだものだ。コエツボで汲んで途中まで行き、そこで入ったコエタンゴを渡して、空のを持ってまたコエツボに戻るようになっていた。子供でも其の時分は力が強かつた。

戦後一時期、下肥をくむために馬力の数が増えた時期があつた。二号線を下肥を積んだ馬力が行列して通つた。下肥を積む馬力には、馬力の大きさにあわせた大きな箱をつんでいた。箱は、木枠でちやんと蓋をしたもの。各家庭からはタンゴでくんできてそれを集めて馬力の箱に入れた。コールタールのようなもので黒く塗つてあつた。船大工が作ったもので、洩らないようになっていた。荒巻でも何台かあつた。

ここには馬はおりませんね。もともとは馬力というので馬がひいたと思うが、このあたりでは馬は

なかった。

牛 牛はそこそこの田圃を作っている家ではほとんど飼っていた。戦前百戸程の戸数だったが、多いときで八〇頭ほどの牛がいた。

牛のツメキリといって、バクロウさんが河原でしていた。

牛に直接荷物を載せることはしなかった。

川船 船はこのあたりにはない。農業水路だけで、船をうかべる所はない。先に行った鳥飼のあたりや、寝屋川などでは川船を使った。下肥も川船で運んだらしい。そのあたりは蓮根畠が多かった。最近まで船を利用したことを聞いている。このあたりは地形が高い。

リヤカー リヤカーは軽便に使えるものとして、戦前も私らの物心ついた時分にはあったように思うが、これは始めからゴムタイヤで、比較的新しい。今でも納屋に入っているが、使っている人もある。一人で手で運ぶのには重たい、カタビキを出すほどではないという時には、リヤカーは便利です。自転車の後ろにつけたりした。

自転車 自転車は戦前からあった。私は中学に入った時に母親の里の年寄りから祝いに買ってもらったが、嬉しかったことを覚えている。小浜のモリタというところから届けてもらった。そんなに特別珍しいことではなかった。植木屋さんはほとんど自転車を使って、かなり遠くまで出かけていた。荷台にト口箱のようなものを置いて、そこに苗木をおいたりして、仕事に出かけた。

自転車には三種類あったように思う。運搬用で後ろのコマが小さくて、物を積んでも重心が高くならないようになっていて後ろはタイヤも丈夫なもの。一般のもの。それと、前後ろタイヤの大きさ

は同じだが後ろのタイヤが少し太いものである。

自転車は戦前から普及していた。植木屋さんが仕事に行くには自転車しかなかった。夙川の甲陽園の辺まで自転車で行った。正月前に松竹梅のお飾りを作って得意先にお礼にもっていくのに、尼崎、西宮、大阪の難波に行って、十三を通過して帰ってきた。父親と一緒に行ったのを覚えている。松竹梅の飾りは、植木をおさめた得意先の家にオケとか材料をもっていき、向こうで組んだ。得意先というのは法人は少なくて、ほとんどが個人だった。父親の仕事先は花屋敷多くて、そこは別荘地だったので、正月の飾りは本宅とか店とかにもするので、大阪へも行った。

だから、父親の代から自転車は普及していた。仕事の関係で使う人が多かったからだと思う。

人力車 人力車は、山田医院というのがあったが、あの人は人力車でやってきました。このあたりの医者は、山中さん（小浜、女医さん）、山崎さん（清荒神）、オウミさん、山田さんがあった。この辺では、人力車というとお医者さんというように思う。嫁入りなどの特別な時に人力車を使うことは記憶にない。婚礼は自宅でしたが、戦後はハイヤーで嫁入りしてきた。ハイヤーのはしりだった。

鉄道 荒巻のあたりは鉄道の駅が近い。荒巻は、三田の方からようけ嫁に来るから。「一荷にのたらボウがしなる」といつて婿の家と嫁の家のバランスが取れていることが大事だという表現した人もあった。三田のあたりでは「口に出たい」（福知山線で宝塚の方へ）とあって、三田では1町2、3反で世間並みという。このあたりでは五、六反で世間並み。一町五反を越すとそこそこの百姓という。価値は別として土地の広さで言うと、大きな百姓家から荒巻へ嫁いで来ることも多かった。

どういふ訳か知らないが、昔から下の村ですぐ近くのコウノイケと荒巻の縁組はない。氏神さんど

うしが仲が悪いともいう。オギノとの縁組も少ない。オギノもコウノイケももともとは荒巻からの分村であるらしい。

バス・電車 市バスは戦後、阪急電車の伊丹は大正、阪鶴線（福知山線）は明治、荒巻の人はほとんど阪急の伊丹は利用しない。福知山線か阪急宝塚線の中山の方へ上がる。三田との縁組が多いのは方角にもよる。鬼門にあたる北東は避ける。

参詣 伊勢講は荒巻の村に幾つもあった。今でも続いている伊勢講もある。

大峰さん参りとか、伊勢参りというが、娯楽である。成人の仲間入りの意味がある。汽車で行く時は中山駅に行く。村からの途中にサカムカエをするなどのことは記憶にない。

愛宕講の講帳は残っている。妙見講は個人で参加するもの。尼講はお寺さんに寄り、「食い散財」といった。

運送業 村の中に専門の運送業はなかった。村の中の馬力でことごとたりたので、村外の運送業を頼むことはなかった。

軍用鉄道 戦時中ここに、元は築港にあったと聞いたんですが獣医医材所が移転してきた。それより先から兵器補充所（自衛隊病院あたり）に福知山線の中山からの引き込み線があった。獣医医材所にも線路用地を確保したが、線路は引かなかった。米のよく取れる田圃を取られた。終戦間近のことであり、あんまり引き込み線に汽車が通ったという記憶は無い。その施設に戦後は沖縄から米軍の航空隊が短期間であつたが進駐してきた。その兵隊達が、ある人が村のため池を借りて魚を養殖している池で釣りをするので困つたが、言葉が通じないので困って英語の出来る学校の先生を呼んで来て説明

したこともあった。

ラッキーストライクというタバコを持ってきて、下駄とかえてくれ、帯とかえてくれ、日本のものと交換してくれと会話集を片手に言ってきた。半年位の間のように思う。

この鉄道の引き込み線は荒巻の生活とは結びつかなかったが、今でもその後の一部が残っている。国有地は戦後払い下げを受けた。

二 交易

市 市ということは聞かない。お祭りの時には、テキヤさんやお宮さんに来ていた。覗きカラクリも来た記憶があるが、子供の時分のことだと思ふ。稲荷祭り（七月二十二日）にも来ていた。夏祭り（七月二十一日）と秋祭り（一〇月三十日、今は一〇月二十一日）。夜店ですね。

バクロウ 牛の売買はコウノイケにバクロウがおりまして、タダにもバクロウがいた。河内からも来た。専門のバクロウがいた。市ではなく、バクロウが家まで牛を連れてきた。

村外への労働 村から外に働きにでることはどうかというと、植木の職人として、売りに歩くということではなくて、庭師が施主から注文を受けたときに木を探しにこのあたりに来る。そして、これとあれを買うということなる。

植木の購入 松などは、山陰に買ってこれとこれと買って買う。すぐに持って来ると、細かい根がないので枯れるので、だからある年にネマワシといって、一度根を切って、もう一度埋め戻して一年

おいてから、今度は全部掘り起こして、貨車なり船なりでこちらに運んで来た。

クニマツは出雲や山陰、四国から引いてくる松のことで、ジマツ（地松）に対してそう言う。資本力もいるが、向こうでは安いが、ネマワシの作業をする時は、一ヶ月ほど旅館に泊り込んでする。その費用はかかる。向こうで知り合いを雇う。ほんとうは、二年程置きたいのだが盗られる心配があるので一年おいて春に持って来る。それでも盗まれることがある。また、枯れないように、向こうの人に水やりを頼まないといけない。そして、掘り出す時にも何日もかかるし、それだけ注意をして持って帰っても何割かは枯れてしまう。それを山陰からなら貨車で、四国からは船で運んでくる。一〇本や二〇本ではなくもつと沢山買い込む。それを枝を上手に縛ってこんなに積めるものかと感心するほど貨車に積んで帰ってくる。

それを畑に植えて、一、二年してぼちぼちカツチャク（確着）したらセイシ（整枝）する。

マキは関東の千葉あたりで仕入れてくる。一人で行くこともあるし、何人かで行くこともある。私は関東には行ったことがないが、聞いているのは向こうでは防風林になっているのを、一本おきに間引いて畑に植えているのを、それをこのあたりや山本の人が買ってくる。

松も関東でも仕入れることもあったが、聞いているのは山陰や四国が多い。

もちろんこの辺で山にある、それをジマツ（地松）といっていました。山から持ってかえって畑に植えていた。それなどは畑に植えて、三年しないとすっかりとカツチャク（確着）が確認出来ない。タメル時には枝を割って押えることもある。割った青竹で添えて、何年もかける。このあたりの松は「おやじさんが植えて、息子が売れる」という位の回転であった。

サツキ、ヒラドなどの苗木もそれはそれでしている。これは挿し木や種から植えていく。山本のよ
うな苗木の通信販売は、荒巻ではほんの少ししただけです。

天神川の砂が栽培によいと言つて貨車で売ったことがあつたが、それも山本の人がしていた。

行商 行商は、薬屋は昔から来ていた。ここらは大和の、今でも置いていて一年に一度位まわつてく
る。風邪をひいたからと医者に行かずにその置き薬を使うので、一年にすると結構取られる。大和の
どこけは分からないが。今では、行商の権利を買つてまわっている人もあるようだ。昔は自転車で来
ていた。

「おっちにの」薬屋は、リヤカーのようなのを前にして自転車でこぐようにして、やってきた。「お
っちに、おっちに」といいながら、その人は長い間来ていた。子供に紙風船をくれる。

近在の米谷（宝塚市）の人が果物を行商で、女の人が二人ほど、オイワハン、マサエサンというお
ばあさんがリヤカーで来たいた。

魚は西宮の方から自転車で、イワシとか、「手でかむイワシ」といって、そしてカニを売りにきてい
たのを記憶している。魚は祭りに食べるとかではなく普段も食べていた。

村の中にも魚屋さんがあつた。アラセという店があつた。

雑貨・小間物は、村に店があつたから特に行商ということはない。オイワサンは雑貨ももっていた。

暑い时分には、ワラビモチを売りにきたオッサンがいた。どこからかは分からない。手押し車をカ
ラカラいわして。おいしかった。

紙芝居は来てました。

上の村の中筋（宝塚市）から豆腐屋が来ていた。荒巻には豆腐屋がなかった。

瀬戸物は池田あたりに買いに行った。瀬戸物市は聞かない。

ここから中山さんの縁日、八月九日の無縁経に、おばあさんがホウズキを売りに行った。

物々交換 終戦後に建前はお金で払うものを米の方がよいということで、物々交換することはあった。
タノモシ お膳などの道具を揃える時は、三〇人分を揃えるということを知っている。

タノモシということを知っていたことは知っている。「タノモシをタク」（煮炊きをする・お礼に食事を振舞う）という表現がある。それは私たちの祖父の時代のことである。

話者 小西 勲（いさを）

大正一五年六月二十四日生

堀古忠夫

昭和 五年五月 一日生

第三節 三田市山田の運輸・交易

一 運輸

カタビキ

昭和の初めから戦争の前にかけて、農作業や山仕事などの農家の生活を通じて、ものを運ぶ手段として一番基本だったのは、カタビキとよんでいた二輪の荷車であった。これは人が肩に、ロープではないがあてるもんがあつて、それを肩にひっかけて、ひっぱる。車輪は二輪。大きさでいうと、台の長さは五尺から六尺位、六尺は大きい方になる。前に、持ってひっぱるカジ棒があつて、その長さは三尺から四尺。横幅は、台の幅で二尺余（七〇センチ）。台は木でつくつてある。車輪は、話者の家で使いよつたのは、ゴム車輪やつたが、この村では一般的には鉄車輪の方が多かった。鉄車輪というのは、車輪が木でつくつてあつて、その外側に鉄がまいてある。ゴム車輪は、木の車輪にゴムをまいてあり、この方が運ぶのに楽だった。

カタビキで運ぶものは、米や麦といった農産物と、戦前のことやからタキギ（薪）類も運んだ。材木なども運んだ。米俵なら、鉄車輪のカタビキなら、まあ昔の米俵で五俵位（三〇〇キログラム）を運んだ。山田の集落から三田の駅位まで、カタビキで米を運んだ。駅の近くに元の三輪の農業協同組合があつて、その倉庫まで、まあ駅やなあ、駅まで運んだものだ。農協の倉庫は、戦前からあつたが、カタビキで村から米俵を運んだのは終戦後のものない時代のことである。戦前は、百姓が米を運ぶのではな

く、商売人の運送屋の馬力が、村に米を取りにきよった。馬力は、馬がひく荷車のことである。

山から、タキギをおろすのにも、カタビキで運んだこともある。

カタビキは、昭和四〇年ころまであったやろか。カタビキの後にリヤカーが出来たが、ここでは、リヤカーのあった家はそんなに沢山はないわ。カタビキがなくなったのは、軽トラックが出来たさかい、それでカタビキが姿を消していった。

テンビンボウ

カタビキが入れない田んぼ仕事とか畦の仕事で、ものを運ぶのには、それは、人がニナわなしようがない。

ニナウというのは、ボウ（棒）で担うことで、一人でボウの前と後ろで二つの荷を担う。前後ろ二つで、これをイツカ（一荷）という。また、大きなもの重いものは、二人で一個を担って運ぶこともあった。ボウの中央に荷をさげて、その前後を二人で担う。これは、一荷とはいわない。

担うのに使う棒は、昔からテンビンボウというのがあった。二人でかつぐ場合はマルタ（丸太）の棒を使う。一人で担ぐ場合は、つまり、一人で一荷担ぐ場合はテンビンボウを使う。テンビンボウは、自分のところで勝手に作っている人もあるし、荒物屋で売ってもあったし色々やった。どの家にも、二、三本はあった。長さは、六尺までないな、五尺位か。木の材質はマツもあるし、何の木が良いかといえど、コブシの木が良いという。コブシの木は、白い大きな花が咲き、山でとってくる。

荒物屋で売っているのは、そら、磨きをかけて立派なもの売っていた。売っていたテンビンボウが

何の木かは、覚えがない。話者の親やったら知っていたやろけどな。荒物屋は三田の街の中にあつた。話者の家には、店で買ったのと、自分のところで作ったのと両方が今でもある。店で買ったといっても、そんなにも立派なのではないが。

テンビンボウの両端部分には、荷をかける紐がずれないように、爪が二つついていて、その間に紐をかけるようにする。

テンビンボウで運ぶ物は、モミ（粃）も運ぶし、麦やら米やら、野菜もんも運ぶしな、それに堆肥も運ばんとしようがないし。とはいっても、テンビンボウは毎日使うというものではない。土方仕事ならそればかり、毎日使うだろうが、百姓の仕事では、作業に応じて時どきに使う。テンビンボウを毎日使うほどに、そない品物があらへん。

ニナイダテ

タテというのに、普通のタテと、ニナイダテというのがある。普通のタテは、大きくてモミを一石（二〇〇リットル程）入れることが出来る。それに対して、ニナイダテの方は、片方に四斗（八〇リットル程）入れることが出来、それに、長い紐をつけて、テンビンボウで担う。ニナイダテは、ワラ（藁）で作った入れ物で、深さが五〇センチ位で、直径も五〇センチ位はあつたかな。底は絞つてあつた。これで、モミを田んぼからウチ（家）まで運んでくる。モミは外へ出して干さんならんから、その間、大きいタテに入れておく訳や。また、乾いたモミも、その大きいタテに入れて置いておく。それで、よい加減たまってきたら、モミスリをして、米にせなあかん。

そやから、家には、大きなタテが二〇〜三〇はあった。収穫期には、それらのタテをニワからそのあたり一杯に並べていた。合いの手には、いらへん訳やな。いらん時は、ネズミが食わないように天井裏へ吊っておく。畳んで置いておくと、ネズミが食ってしまうことがある。

収穫の時は、このニナイダテで、モミを田んぼから運んでくる。何度も往復せなあかん。女の人も運ぶのに、テンビンボウが何本か必要だった。とはいっても、遠い田んぼやったら、男一人が運ぶばかりや。

ただ、話者の家ではそんなにして、ニナイダテで運んだことはあまりなかった。というのが、話者の家では、カタビキが田んぼのハタ（端）まで行けたので、大きなタテを直接田んぼに持ち込み、それを二人して丸太棒でカタビキにのせて、家まで運んだ。カタビキに、大きなタテを三個積むことが出来た。ただ、モミを、どないして家へ持って帰らならんということはないので、その時その時、山田でも家々で違っていたと思う。

話者の家では、戦後に、紙袋に入れてモミを運んだことがある。これは、この山田で乳牛を飼うようになってからで、酪農をしている人から飼料用の紙袋を譲ってもらってそれを使った。紙袋にはせいぜい二斗位しか入らない。わりと最近までこの方法を使っていた。昭和三〇〜四〇年頃までは乳牛が奨励されて、ここでも乳牛が多かった。話者宅では、乳牛を飼育したことはなかった。

ニナイダテの他に、テンビンボウを使ってものを運ぶ時に、大きなカゴを使った。今では、コンテナといってプラスチックで出来ているが、昔のカゴは、竹で出来ていて目は詰まっている。直径が一メートル程あり、深さも三〇センチ位はあった。もつとも、大きさも色々だったし、浅いカゴもあった。こ

のカゴで運ぶのは、ハクサイ、トマト、ダイコンそんなもんやな、穀類を運ぶのには使えない。

また、皿カゴといって、材質は竹か藤で出来ていて、直径は一メートル程だが、ほんまに浅い。店で売っているのを買ってくる。石の小さいものや、土砂を運ぶ。百姓していて、これを使うのは道路の修理やな。昔は、今と違って市が道路を整備してくれるのでなく、何でも地元がして、砂運びもしていたものだ。

ヤマボウ

山仕事では、テンビンボウにカゴをつけて運ぶようなことは、まあなかった。丸太なら、そのまま担ぐし、シバならボウの両側につきさして二束を一荷にする。このボウは、ヤマボウといって、普通のテンビンボウに比べて、もっと長くて七尺位のもあったし、シバが刺しやすいように、先が尖っていた。昔はシバがなかったら、生活が出来なかったもので、このヤマボウも、どの家にも二本以上はあった。肩の当たるところだけを、肩が痛くないように平らにしてある。

ヤマボウには、ムロの木がよいという。話者の家にあるのは、戦後すぐに自分の家でこしらえたもので、ムロの木は腐らないし丈夫なので、今でも十分使える状態にある。長さはやはり六尺を越えていて、ヤマボウを長めに作るのは、シバを差し込んだ時に、シバが大きいさかいにつかえるから長めにしているという。

シバを作る仕事は、みな冬の仕事やね。一二月から二月ころまでや。シバをつくる仕事は女もしよったけど、主としては男の仕事になる。冬の間の大事な仕事になる。遠いヤマでの仕事やったら、弁当持

ちで行くこともあるし、近いヤマやったら、昼の食事に家に帰ることもあった。シバを一日で一〇束余り作ったら、一人前といったものだ。昔は何かにつけて、手ぶらで帰るということはしよらへんかったから、昼に帰るときにも、一荷は持って帰っていた。そやけども、もっと沢山のシバは、ヤマにおいて枯れるのを待つ。というのも、ナマのシバは重いが、枯れると軽くなるのでヤマに置いておくことになる。そして、おりをみて取りに行く。ヤマは個人持ちのヤマもあるし、入り会いのもあった。

ここでは、頭にのせて運ぶということはない。

背負うて運ぶということは、女の人が、山からシバを持っておりるのに背中に背負っていた。シヨイコのような道具を使うのではなく、帯といおうか、ちよつとしたナワで背に二束背負い、持っておりていた。女の人は、ボウやと肩が痛いさかい、よう担わんで背負っていたのやと思う。二宮金次郎みたいな格好やな。カゴを背負うということはないなあ。

この辺りでも、半島から来た人はシヨイコを使っていた。これだと、沢山の荷を運ぶことが出来た。しかし、ここでは、シヨイコを使うほど、運ぶものがなかった。

牛・馬

牛は、田んぼ仕事に使う雌の役牛がどの家にも一頭はおった。それは、もう大昔からや。話者の家でも、ずっと一頭飼っていた。牛がいつ頃までおったか、はっきりしたことは忘れてしもたが、まあこれも昭和四〇年頃までのことやないか。耕運機が出来てから、それでもしばらく牛はおったさかいにな。牛は、田んぼを耕すだけで、荷を負わせたり荷車を牽かせたりと、ものを運ぶのに使うことはなかつ

た。家で飼っていて、ある程度大きくなったらバクロウに売って、また交換に若い牛を育てる。

このあたりの牛は、道場の塩田に二軒バクロウがいて、どの家と決めた訳ではないが、この村に入って商売をしていた。

聞いた話だが大阪の貝塚で牛の市があり、そこで買い付けてきたらしい。肉がつくのにはやっぱり五、六年はかかるやろ。せやけど、連れてくるのが生まれて三年位の牛やから、家におけるのは、一、二年のことになる。百姓で、牛を売る収入を当てにして牛を飼っている人は、まあ少ないからな、せやから二年でもおいといてもいい訳だが、バクロウがようけ儲けるために、はよ売れと次の牛を連れてくる。バクロウが牛を売るのは貝塚ではなく、また別な所に売っていたと思う。まあ、バクロウが儲けよっただけのもんや。

この村に馬はおらへん。戦前、米の引き取りに馬力が来たが、ここには馬力を扱う運送業者はなかった。引き合うだけの仕事がなかった。

運送業者というと、三田駅の近くに、馬を二匹、馬力を二台使う程のマルドウ運送店というのがあった。戦前は馬力をひっぱりよったけど、戦後しばらくして辞めて勤めにできるようになってしまった。

山師が入って山仕事をするような時には、よう馬力が入っていた。それは山師が、自分で馬を持っていった。馬力は、やはり牛では駄目で馬に牽かせることになる。馬を扱うのは牛のようにはいかない。山師も、人夫を雇って馬力を牽かせていた。

山師は、山の木を切って売る。山主は何も知らないので、材木屋が入って、山に適当に値段をつける。材木屋は自分では伐採できないので人夫を雇って切り出していた。よい松が生えた山やったら、よい金

になつとつたやろな。雑木林でも、金にはなるけど、割木にするのに人夫にお金をくわれてしまう。せやから、あんまり金にはならん。松やったら、材木そのまま売れた。材木のまま売れると途中の手間がいらぬ。このあたりは雑木林は少なかったが、松林にも、雑木があつて、それをタキモノにしていく。それはそれで専門の人夫がおつて、毎日そればかり、ヨキでまあ上手にタキモノをこしらえた。これらの人夫は、村の人ではなく、それぞれよそから来た人がしていた。百姓人夫ではようせん仕事やな。

牛について

牛は一軒に一匹がいた。多い家で二匹置いていた。牛を使って耕していた。牛は黒牛である。ところが今はトラクターあるいはコンバインとかの耕耘機が普及したことで、牛を使って耕すことがなくなつた。そして牛を飼うためには藁が絶対に必要で、藁なしでは牛飼いが出来ないのに第一に藁がない。さらに飼育に対する採算が合わないのです、山田では牛の飼育を今はしてない。

牛の交換

但馬とか貝塚が子牛の産地・市場で博労は三田に連れてきて育てる。農家に子牛を持ってきても間に合わないから、博労は但馬牛の若い成牛を持ってきて、農家が飼うて肥やした牛とを交換した。二年ぐらいで交換をする。早いと一年で交換をしたが、脂肪ののりが悪く肉にならないと、もう一軒どこかの農家に持っていった。交換の時に博労は肉のついた牛と新しく持ってきた素牛の値段との差額を農家に置いて帰った。ただこの差額ははつきりとせず、「博労への奉公」といい、博労のもうけとなった。持ってきた若い牛は全部雌であった。雄は気が荒いから持って来なかった。ずっと後になってキンヌキも

あつたが採る人はめつたにいなかった。新しい牛はまず仕事してくれるか、「こんな気の荒い牛やつたら肉にしたって、肥も悪いしあかんやろ」と連れてきた牛を連れて帰ることもあつた。また、たんまに妊娠した牛があつて農家で生まれることがあつた。そこそこの牛になるそうやなと思うと、自分で縄しこんだり、ソリひかしたりしてしこんで、ええ牛に成ればもうけになる。道場町塩田の博労と取引をした。

牛の餌

夜に藁を押し切りで切ったりして用意をして、麦を炊いて藁の上にあけて、米糠を藁にまぶして混ぜて毎晩食べさせる。昼には草をやる。ぎょうさんの草を食べるためこの草刈りが大変である。田んぼのあぜの草を刈る。冬は夏に刈った草を干し草して、束ねて納屋の屋根裏に置いておく。麦作りは絶対に欠かせなかつた。また米のとぎ汁やら流し場の洗い水やらを手提げの桶にためて置いて、釜に移して飲み頃の温度にしてやった。牛のしこみたづなは馬は二本、牛は一本である。一本のたづなでチャーと言うと左へ曲がり、オーと言うとパツと止まるように操り、この一応の常識を牛が知つとつてくれんと使いもんにならない。これがまず肝心で、「何やったら一編鋤いてもろたらええ」と田んぼに連れて行って、「まあこれやったら行けるやろな」となると良しとなる。まず肉牛になるよりも、使役が肝心であつた。ところが痩せた牛やらあんまり若い牛は一町からの鋤きに使えない。田に初めてでうまいこと動かん牛とか、そらごんたくそで手におえん牛は、女の人はハナトリあるいはハナモチと言って、牛の鼻をとつて先達みたいにして田んぼの中を唐鋤きをつけて引っぱって鋤きながらしこんだ。この時ばかりは牛はいうことは聞けへんし、足はふまれるやらで往生をした。そうかという、牛が発情期に入ると

暴れ歩いて手綱を振り切つて、唐鋤き引きずつたまま山田中の道を走り回る牛がなんぼおつたかわからない。また、かんぬきがはずれてパツと飛んで逃げる。「牛が出た、大変や」と、帰つて来ることもあったが、追っかけて行くのが大変であつた。器用な人は牛を使つてたまに山から大きな木を荷車に積んではこんでいた。

堆肥

戦後コンバインが入るまでは、長いままの藁ではなかなか腐らないので藁と牛の糞を混ぜて発酵させて肥料を作つた。今はコンバインが藁を短く切つて田に自然に戻してくれるから堆肥はしない。中には堆肥の欲しい人は酪農家からもらつて来て田に入れていけるところもある。戦前ニシンや鰯がようけとれよつた時はホシカといつて肥料をゴついこと積み上げて使つていた。

飼育の後退

耕耘機が普及して牛を使うことがなくなった。さらに牛の飼料代に経費をかけて、新しい牛と交換した時に経費以上の収入があればよいが、なかなかそういうようにはいかない。今山田には牛は一頭もない。

その他

牛に対する信仰はない。五月すぎたら牛は極楽という、食べて寝て食べて寝てするからそういう。

キンマ

山から木を出すために、馬力を使うならそれが通る道を作つた。ワイヤーロープで引っぱつておろそ

うと思えば、ワイヤーロープのために道を作った。また、キンマでしようと思えば、キンマミチをこさえたこともある。

ここの山でも、戦後、キンマを一〇二回見かけたことがある。キンマミチは、下に二〇センチ径の材木をおよそ一メートル程の巾で、二本平行に、レールと同じように山の上から下まで連続して並べる。その上に、今度は四〇五センチ径の丸太を、枕木状にレールに当たる材木に釘で打ち付ける。ちょうど、ハシゴのような状態になる。鉄道の線路では、枕木が埋まっていて、その上にレールが敷かれているが、キンマミチでは、レールに当たるものが下にあって、その上に枕木状に横に木を並べて道をつくる。これで、キンマの道はできとる。

キンマの木を積む台車の部分は、だいぶん長いやろな、二メートル位はあるやろ。カシの木で、一〇×二五センチ径の木を二本でつくる。それを木の道の上に置いて、滑り降ろす。あら、ごついこと木を積みよった。カスガイとロープとで組み立てて、よう、あんなことするな、と思うほどうまいこと積むがな。道をつけるときから考えて、滑りやすいように、山から下へおろすのに勾配をつけてある。だから木の道の上を滑ってくる。たくさん積んだ木のバランスを、ハンドルで操ってカジをとる。話者も、びっくりするほどだったと。慣れたもんで、たいがい一人で、トビー丁とロープを肩にかけて、カーブを曲がっていく。えらいもんや。

キンマミチは、話者が知っているもので、一〇〇メートル位だったと思う。

キンマミチは、キンマを操る人夫が、そこいら周りにある木を切って組み立てる。

山師は、どこから来たか知らんが、三田の駅前材木屋も山を買って、山をやっていたことも

ある。山をやつとるものは、個人個人で交渉して、仕事をしていた。入札をするというようなことはなかった。

キンマでおろしていたのは、やはり、建築用の松だった。

キンマミチをつくったのは、ここでも珍しくて、たいていは馬力でおろしていた。

マツタケは、今では出んようになったが、戦前はよう出よった。車の排気ガスが悪いらしくて、最近車が入るから、マツタケが出んようになったように思う。戦前は、テンビンボウで深いカゴに入れて担い、三田の町まで売りに行ったことはある。マツタケ山の入札も、この辺は少ない。入札するような、大きな山がない。高平の方は、大きな村山があつて入札があつたらしい。

舟

ここには、舟はない。

自転車

話者の父親が自転車を買ったのは、昭和三年か四年やな、これはこの村としては早いほうだった。話者が小学校の三年の時には、もう自転車に乗りよつたさかいにな、大人用の大きな自転車やったけど、今みたいに小さい自転車は買ってもらえないさかい。

人力車

そら人力車も来よったで、でもあんな高いもんにはよう乗らんわ、というたもんや。嫁入りの時には、人力車を使った。話者のおばさんが、新三田駅の近くの福島奥に嫁入りする時に、ここから人力車で行った。大正末か昭和の初めの頃やなあ。

それやとか、病人が出来た時に、お医者さんに来てもらうのに、人力車を頼んだ。三田の駅前が開業していたお医者さんは、自分の所に人力車があり車夫を雇っていて、往診はその人力車を使っていた。一般のもんは、人力車には、よう乗らんわ。今のタクシーより高いもんなあ。三田の駅前には、客を待つ人力車があったような記憶がする。話者が子供の時分のことなので、はっきりは知らないが。

二 交易

出稼ぎ・村外労働

出稼ぎというもんじゃあないが、土方仕事に行く。話者は、貴志あたりの三田川（武庫川）の改修工事を県が行った時やな、行ったことがある。昭和一、二、一三年のことで、当時は一七才だった。この村からも四、五人行っていた。農閑期にあたる冬や夏に、家から自転車を通った。

また、ナカシ（仲仕）の仕事もした。神戸や大阪では、船の荷物を扱うハマナカシ（浜仲士）というのがあったが、三田の場合は、三田駅のエキナカシ（駅仲仕）で、駅の荷物を貨車に積み降ろしをし、また、それに付随した荷物の配達もした。話者が兵隊に行く前の一八才だから、昭和一三年のことだった。この仕事は、二年ほど、年中通してした。その当時に三田駅で扱った貨物は、出ていくものとして

は米、材木であり、入ってくるものとしては、肥料、酒やビールがおもであった。また、その他諸々の品を扱った。

日当は、二円五〇銭く三円位だった。なお、土方仕事の日当は、一円く一円二〇銭もあつたら上等だった。エキナカシの仕事は、重い荷物を持つきつい仕事なので、だれなと出来ない。この村からは二人行っていた。駅からの荷物の配達には、カタビキを用いた。配達する地域は、旧市街地の三田、三輪のあたりだった。

女の人が、村の外に働きに出るということでは、戦争に負ける前の昭和一九く二〇年頃には、女子挺身隊というのがあつて、この村の娘さん連中も、神戸あたりまで行っていたらしい。

伊勢参り・大峯さん参り

話者が、兵隊に行った昭和一七年頃も、まだ伊勢参りや大峯さんに参ることは続いていたと思う。これらは、それぞれ講があつて、それで参っていた。話者は大峯さんには行ったが、伊勢参りは戦前はしてない。大峯さんのお講には、田んぼはなかった。伊勢講には、講の田のある組もあつた。大峯さんは、たいがい、男は、年がいくと行けないのでいけいけと言われて、若い時に一遍は行っていた。

行商

戦前に、村の外から行商に来た人としては、魚屋さんは、人は違つても、誰かは毎日来ていた。尼崎の方から来ていて、尼崎市場で仕入れていたのではないか。始めは自転車で、次は単車で、やがて軽ト

ラックになった。村の中に魚屋があったことはない。三田の町まで行けば魚屋はあるが、行商で持つて来ると、今でも買うことになる。行商で扱う魚は、一般の魚屋と同じようなものだ。注文を聞くのではなく、仕入れた品を持つてまわって来る。

話者が本当に子供の時分には、女の人がテンビンボウで担って魚を行商していた。三田の人で三田の市場で仕入れて、クジラやイワシ、サバなどの魚を売りに来た。昔は、クジラ肉が安いさかい、ようもつてきよった。

牛肉や豚肉、カシワは行商ではなく、それぞれ店があった。カシワだけ扱う店もあったが、それだけで商売が成り立っていたんやな。魚屋だけが、行商にまわっていた。他のもんは、高いさかい、持つてきても売れへんがな。カシワは、昔は牛肉よりも高かった。まあ、特別な時にしか食べなかつた。

雑貨屋は、昭和三〇年ころまで来ていた。どこから来ていたかはわからない。自転車で来ていたが、毎日はない。

金物屋も来ていた。終戦直後は、仕事がないから、いろいろな人がものを売り歩いてきた。だから、金物を売りに来ても、それが金物屋かどうかわからなかつた。

薬屋は、置き薬をしていて、年に五く六回まわって来た。話者が子供の頃もまわって来ていた。一人の人ではなく、メーカーが幾つもあったので何人もまわってきた。このへんは、富山やない奈良からきた。昔は、背中に背負って来たが、悠長なもんや。安宿に泊まって村をまわってくる。おもに、歯痛や風邪薬を使うことが多かつた。メーカーは違うが、似たような薬や。

鎌などの農道具は三田の店で買った。鍛冶屋さんには、今はないが昔は三田にあった。その鍛冶屋が、

村をまわっても来ていた。チビたやつを、打ち直してくれる位やな。

市

この村で、イチ（市）が開かれることはなかった。

貸し借り

お膳なども、それぞれの家が個人個人で持っていて、貸し借りをすることはなかった。

お膳をどうして手に入れたのか、話者の祖父の時代のことなどで、今はわからない。お膳などを行商で、売りに来たことも、話者の若い時代は戦争があつて、ものが段々無くなつていく時だから、そういうことはなかったように思う。

綱貫靴の履物

昭和二〇年代までごつつい革製の紐で括る靴が家にあつた。道具入れにほうり込んだままにしてあつた。ただ爺さんはいているところは見たことがない。パツと見たら靴とはわかつた。何という靴かわからない。どこで買ったのかもわからない。爺さんは慶応生まれで、よくはいても明治とちがうだろうか。

第二章 年中行事

第一節 西宮市越水の年中行事

一 正月行事

コトハジメ 十二月十三日はコトハジメといって、この日から正月の用意をはじめめる。ススハライといつて神さんの道具を家のカドに出して掃除する。仏壇も掃除するが、家の外へもち出すことはない。シメナワ その年にとれたワラを使って作る。適当な量のワラをない、ワラひとたけの長さにする。七・五・三にワラをなえこんでいくが、七は多いので略して一・五・三にする。ヤマグサ、モッコク、ヒイラギ、ユズリハの葉をゆわいつける。ふつうは、おシメさんという。

シメナワをはるのは、神さん、仏さん、各戸口・入口の表と裏、大きな窓、便所、コエツボ。それに翌年の苗代の予定地に竹を一本たててその先を割り、シメナワをはさみこんだ。

表の入口にはるシメナワは、ゴボウジメという。これは同じワラひとたけであるが、太くする。ヤマグサ、モッコク、ヒイラギ、ユズリハの葉をつけるのも同じだが、ダイダイをそえる。七・五・三の数にこだわらずに、ワラを半分において三ヶ所にはさみこむ。

床の間などで、三社、五社とまつつてあるところは、ナワをたして長いシメナワにする。ユズリハなども社の数だけつるす。

カドマツ 元は、持ち山で適当な七、八尺近い松の木を二本切ってきて、門の前に一間程の間隔で穴を掘つてそれを立てた。松の木の間に竹を横にわたし、それに沿つてシメをはり、まん中にヤマグサ

と大きなダイダイをゆわう。松の根もとはモリ砂をする。竹と梅の小枝をそえる。

両方ともオンマツであつたが、あんまり頓着しなかつた。

最近では、入口の両方の柱に小さな松を打ちつけていた。半紙でまいて、ミズヒキをかけておく。根のあるもの、ないもの両方あつた。

モチツキ あまり固くならないように、餅は十二月二十五日から先についた。二十八日につくことが多かつた。九日モチはつかないといつて、二十九日にはモチツキをしなかつた。

モチバナ モチツキの日にモチバナもつくつた。前もつて用意したワラを半にぎりほど、すぐつてきれいにする。穂のついた方をなつて二本のナワにしてくくる。反対の方を十二(閏年は十三)にわけて、それぞれに、にぎりこぶし程の餅を五つずつ位つける。そのままではくつつくので、一度ムシロの上で乾かした後、くくつたところを床の上にかける。

オオツゴモリ 三十一日をオオツゴモリといい、この日にカドマツ、シメナワなど正月のかざりつけをする。日がくれると、トシコシイワイといつて、ふだんのお膳に塩イワシを焼きものにしたのを各々一匹ずつそえる。ツゴモリソバは、イリコのだしで醤油あじ、ネギをこまかくきつたので食べる。

ニシメ この日、女は朝五時頃より起きて、ニシメをたきにかかす。常の日はだいたい六時頃起きていた。ニシメはゴマメ、カズノコ、たたきゴボウ、ジャヤマメで、できたものは四段重ねの組重へ山のものから順に入れた。四段のうち一番下だけ少し大きいので、そこにジャヤマメを入れた。

ジャヤマメは、ダイズが主で、コンニャク、ニンジン、ダイコンをジャコのだし醤油の味つけであつさりたいたもの。ゴマメは、いって醤油、みりん、砂糖をたいたものの中に、あたたかいうちに入

れてさつとたいたもの。たたきゴボウは、ゴボウを二寸くらいに切つてゆでて酔の味でゴマをふる。カズノコは、そのまま洗つて入れるだけ。

トシトクジン 台所に、おトシのタナをつるすところが決まっていた。棚は組み立て式で、あいだは蔵へなおしておく。その中に燈明と餅をかざった。棚の下がスになっていて、そこにカヨイやネンギヨクを入れていた。トシトクジンのエホウにむかつてつるしてシメをはった。エホウダナということもあつた。これは小正月までつるしておいた。

なお昔は、集金は一年に二回で、オオツゴモリとハゲ（ハンゲシヨ）であつた。

大神さん 天照大神を小正月まで掛軸で床にまつる。その前にオオガミをひと重ねおく。その上に、コンブを巻いて先を切つて花のようにしたものを水引をかけてのせる。餅の前にはワラでの形のもの五つ作つて、餅が見えないようにする。これは二つで米一升を意味する。干し柿、ミカンをおき、さらに前に三方さんに米一升を盛つたものと、三方の上に組重をおいたのを並べる。

これらは全部十五日にさげて、アズキガユを作る時に使う。おかざりは全部女の仕事である。

荒神さんには三段がさねの鏡餅をそなえる。

トシマイリ 男は夕食のあと、トシマイリといって氏神さまへまず詣り、そのあと順に信仰しているところへ詣る。ていねいな家は年末のあいさつにやつてきた。

フクビ 台所の火ばちでたき火をたいた。これをフクビという。

アクマバライ 十一時頃になると、豆木をとつてきて、火ばちの上で豆木とキクをくすべた。これは悪魔を払うためである。この火をカタギにうつして灰をかけて種火として翌朝これを使った。

寝るのは除夜の鐘を聞いてから。

ワカミズムカエ 主人は四時頃に一番起きてワカミズムカエに行ってくる。越水は、寄合の井戸が三ヶ所もあって、それぞれ行く所が決まっていた。出かける時には、にない棒にオケをさげて、タオルをもっていく。井戸に着くと、トシトクジンのエホウをむいて、となえごとを言ってワカミズを汲んだ。となえごとは思い出せない。むこうで顔を洗った。

家に帰って宵からしたてである雑煮にワカミズをさして、カマドをたきつける。

種火は、火打ち石でおこし、イオウでつけてダイズの木に火をうつし、先にヘツツイサンに火を入れる。火は消えるまで、そのまま放っておき、灰は庭に瓦で作ったハイヤにためておいて、イモを植える時にまいた。火打ち石がなくなっているからは、三十一日のカタギに豆木をくべて火種をとるようになった。

やがて女衆も起きてくる。

最初の雑煮の一膳は、男がついでまわる。これを年中の恩がえしといった。雑煮を祝うとほんのりと明けてくる。この後は、宮さんに詣るのも寝るのも自由であった。

雑煮 正月だけ一人膳をする。これをイワイゼンという。これは三十一日にちゃんと組んで用意しておく。お膳には五品をのせる。カマボコ、ゴマメ、カズノコ、ゴボウを一皿に入れたもの。焼きものかわりの豆煮メ。小鯛をさつとあぶったものか、ない時は塩イワシを焼かずにおいたもの。それに雑煮。

雑煮は、サトイモ、ゴンボ、ダイコン、トウフ、餅を入れてみそ汁でつくる。モチは丸モチで一人

ずつの椀にニコ入れる。椀はカシであった。

牛にも雑煮の餅を食わした。

ヒチトウ 三宝荒神さんの前に、三段の棚をつくり、それぞれにカワラケを一、三、四とおいて、元旦の朝から燈明をあげた。その燈明の火を、日を追ってへらしたが、明治四十年代までになくなったので、詳しくは不明。

正月の遊び 一日は家の中で、スリバチの中で銭をころがして重なったら取る遊びや、百人一首などをした。

正月の掃除 一日はハオケ(ホウキ)は使わない。福が逃げるといふ。戸も少ししかあけなかった。福が逃ださんように、フロに入らず、水も流してはいかんという。

なお、正月から綿入れを着た。

正月二日 二日の朝はアサブロをする。

朝食はヤキゾウニといって、スマシ汁にミズナを入れたものに、餅を焼いて入れた。それにトロロ汁もした。トロロ汁は山イモをすってだしでうすめたもの。

神さんには、トロロは供えられないので、ナゴハンを供えた。これはおなっぱを細かく切って、鍋にいま御飯がたきあがるといふ時にパラパラと入れ、醤油を入れてませたもの。

朝のうちに田んぼへあいさつに行く。苗代のおシメをかざった所にいき、「本年もよろしゅう。昨年はお世話になりました」といってくる。

それから菓子折をもってお礼まわりにいく。その時先方からミヤカシといって祝儀をもらう。

洗いぞめ この日は洗たくをしてもよい。洗いぞめという。ほうきではいてもよい。

正月四日 この日から田んぼの仕事を始めるが、十四日まではハヤジマイといって明るい間に切りあげる。

この日、フクワカシといって水菜のおかいをする。ミズナ又はマナ(ナタネ)を入れてもよい。

七日正月 七日は七日正月といってナナクサガユをつくる。これはナナクサという名の、タンポポとよく似た白い花の草一品をとってきて、ゆでてカユの中に入れた。昔はうたをうたってしたらしいが、忘れた。

初エビス 正月十日の初エビスにつづいて、十九日の初厄神、二十一日初大師、二十五日初天神、二十八日初荒神とあり、それぞれ奉公人は休みになった。

伊勢講 十一日は伊勢講があった。村で三組あり、めいめいに空の膳と、御飯をメンツにつめたのを持って輪番の所へいく。ゴチソウは輪番が用意した。かつては講の全員で伊勢参りをしていたらしいが、野田氏の青年時代にはお金を借りて抜け参りをした。この借金は大目にみてもらえた。

小正月 十五日は小正月という。前日におシメなどはずして家ごとにかため、餅、燈明をあげておく。この際、便所に使ったシメは別にしておく。

十五日の朝、村の二ヶ所で朝暗いうちに燃やす。これをトンドという。便所に使ったシメは、別に集めて燃やす。この時に、古いやしろなども燃やす。トンドの火で餅を焼き、これを夏に雷がなったら食べる。雷が落ちないという。

トンドの灰は持って帰って家のまわりにまく。これは悪魔払い、家の厄除けのためという。

アズキガユ この日、天照大神にそなえていた餅をおろしてきて、アズキガユをたく。餅は焼いて入れた。

ヤブイリ 十六日は、嫁さんのヤブイリで、地獄の釜もふたがあくといつて、嫁さんもこの日から二、三日の間、姑がよいという日数だけ里帰りする。

姑は嫁に、ソウブツといつてあわせの着物をこしらえて、それを着せて帰らした。実家へみやげを持たせ、嫁が実家から帰る時は、実家の親が姑にみやげをこづけた。

カンモチ 節分の前の日に、カンモチ（寒餅）をつく。寒の水を四斗ダルに一杯に入れておく。米、餅米を半々にしたウルモチ（棒餅）や、小餅、オカガミを作った。

また、サトウ、マメ、アオノリ、エビのオカキを作った。越水では昔お蚕さんを飼っていたので、カイコダナにスを広げて、その上に並べて乾した。オカキは、毎日コビルといつておやつに食べた。

節分 節分は神さんの正月といつた。昔は麦御飯に、塩イワシを焼いて年越しイワシといつて夕方に食べた。またダイコン、サトイモ、餅でみそ雑煮を食べた。ソバをゆがいて年越しソバといつてイリコ、コブの dashi で食べた。マメマキは昔はなかった。正月の餅を食べるとトシをとるといつて、この日にトシトル風はない。

二 春から夏の行事

初午 初午に詣る人は少ない。

彼岸 彼岸には、寺で彼岸講があった。家では彼岸ダンゴをこしらえる。これは米の中米で粉をひいて湯でねり、それを湯にうかしてから真中をへこめて、へソダンゴにした。神さんへ五つずつ皿に入れて供えた。

二、三日前に一家に一人男がでて墓の掃除をし、彼岸には墓参りして花を供える。

モモノセック 四月三日は、ひしがたのヒナの餅をつくった。ヨモギを入れた青いの。粟を入れた黄色いの。そのままの白いのを、三つ重ねた。

メンニョー 四月十八日は、弁当をこしらえて広田神社の山へ花見(ツツジ)に行く。二段重ねの弁当はカヤクメシと決まっていた。あとじまいといって、主婦は留居番をして行かなかった。

今は宮さんの祭りが十六日なので、その日にしている。この行事をメンニョーという。

ウズキヨウカ 五月八日は、お寺では、お釈迦さんの甘茶をつくった。それを家へ持って帰った。

家ではテントウバナといって、サオダケの先にモチツツジとウツギを十字型にしてつけたものを立てた。この花はおろした後、陰につつておいて何かの時に使ったが、それがいつだったかは不詳。

この日は勝手ヤスミ。

タンゴセック 六月五日にはコイノボリをあげて、チマキをダンゴ粉でつくる。ダンゴをヨシの軸につきさして、マコモの葉でチマキの形につつむ。これをトウスミで五つくくって、人形などの飾りをしてある前におく。

センダンの小枝にヨモギの軸をそえて、シヨウブにくくりつけ、悪魔よけといって入口の屋根にほりあげた。頭痛よけといって、シヨウブでハチマキをする人もあった。シヨウブをたばねたものを

つけた。風呂にも入った。

このころは、ネコの手もほしいころなので、セックだが休みではなかった。ウシマワシ タンゴセックの日にあった。

村の小使いが、現在ウシマワシという小字になっている所に、竹の先にゴヘイをつけたものを差してくる。そこへ各家から、牛の背にマコモをかけて連れていき、そのゴヘイのぐるりを三回以上まわす。牛の健康を祈るためで、小使いは、そのお礼としてチマキをもらった。

サナブリ 田植えがすむと、各家でゴチソウをつくり、一日休養した。サバズシなどをつくったので、田植え歌で「タウエもしたら、うえサナブリで、サバのスシくて、ねて祝う」といった。この日、ハツタイをこしらえて、それをゴハンにかけて神さんに供えたり、一膳だけハツタイをゴハンにかけ、米の花として、米がよく咲くようにとって食べた。

昼におすし(サバズシ)をした。ナマブシを甘からくたいて、つぶして箱ずし(オシズシ)を作って食べる。残れば夜にも食べた。これを田植えの間、オカズなどをくれた家に皿へのせてもっていく。アマヨロコビ 田植えの後で、待ちのぞんでいる時に、エエ雨がふった時には、アマヨロコビといって総代が決めて、小使いがふれでまわって村中が休みをとった。

メリケン粉を水でねってダンゴにして、ササムシといって、中へアンコを入れて蒸して食べた。

ハゲシヨ 夏至から十日目をハゲシヨといった。家でウドンを打って、町方の親類に配って歩く家もある。ウドンは長いので、ハメ(マムシ)にかまれんまじないやといっていた。

この日は年二回の集金日で、掛け取りがきた。

土用 旧暦六月二十日から土用に入る。土用には入りがあつて開けがないといった。土用に食べる餅をハラワタモチといった。

三 盆行事

七夕 野田氏が子供の頃には七夕はなかった。

八月七日の晩、七夕さんのササにかざりつけをして(折り紙をしてササにつける)門口につける。七夕がすめば、はずして邪魔にならない所に放っておき、枯れたらもやした。

七日盆 八月七日を七日盆といつて、その前後に井戸を清掃した。越水では八日に決めていた。これをイドガエといつた。村の共同の井戸が三ヶ所にあつて、それぞれ、西ンジヨ、中ンジヨ、東ンジヨの隣保にわかれていた。月に二回位交替で掃除していたが、この日には全員が集まって大清掃をした。

清掃のあと、井戸にスイカを供えた。そして井戸組の当番の家に集まって、カマボコ、ハモの皮に酔の汁をかけたもの、キュウリのトントやサトイモなどのゴチソウで酒をのんだ。

男は墓掃除にいった。男がいない家は、女がいつてした。

タイコ念仏講 十四、五人位の講員がいた。二つの組にわかれてタイコをたたくが、タイコ五とカネが二で一組であつた。各組に予備や見習いの人が四、五人位いた。

七日盆の夕方から練習をはじめ。夕方になったら、ある家のカドにムシロをしいて、念仏のけいこをする。子供が遊びにいつて、タイコやカネをいじったり、大人も涼みがてら出かけていつて批評

したりする。

盆の十三日から本番で念仏する。各檀家を昼の三時頃から歩いてまわる。礼として、お盆か、膳の上に乗せたての黒麦に二錢包んだものを、見習いがフコをもつて行って、もらってくる。

求めに応じて村の外へも出た。西宮の漁村が多く、そこは礼が多かった。

十三日夜半まで、ユカタはハマチリメンの帯をしめて、白タビをはいてまわった。大正初期に後継者がなくて消滅した。カネをたたく人が導師であり、村に不幸があった時にも、一組が出棺前に念仏をとなえた。

ココノカビ 八月九日は、中山参りといって中山寺へまいる。新仏のある家は必ず、そうでない家でも行った。家から塔婆に先祖の戒名を書いてもつて行って、むこうへ供えてくる。新仏さんは、中山さんで塔婆を書いてもらい、祈祷してもらって家にもつて帰る。家の中へは入れず、外に台において祀る。ホウズキを買ってくることもあった。

帰ってから、仏さんの掃除と盆に使うもんをみがいた。

盆の十三日 八月十三日は、朝五時ごろノバカに花をもつて仏を迎えに行く。線香をたいて拝み、帰りは手ぶらで帰る。玄関から入るが、墓へ参る時は塩を用意しておいて、それをふってから家へはいる。

帰ってくると一番に仏壇に参る。仏壇の中には、オハギ、ナス(皮をむいてゆでスリバチですってゴマアエにしたもの)と、ハスの葉をひいた上に、マツカ、ナシ、モモ、ブドウ、ナス、ホウズキ、ササゲマメ(ジュウハチという)、スイカ、ソウメン等を供える。

午後、寺の住職がお参りに来る。夜、年寄のいる家では、三十三番の経をとなえる。その横で、家人がオチャトウをする。オチャトウは、だれかが参っている間はずつとする。

お茶は毎日ためておいて夜に田んぼの口に捨てた。線香を五本ほどたてて、ふり返らずに帰ってくる。

夕方、迎え火といってカド先でムスビワラ一把をたいた。

新仏 新仏さんはアラタナという別なところへ祀る。仏壇の横に台を置き、戒名を書いた塔婆をたて、畳から台へ四段のオガラハシゴをかける。アラタナの上に、ハスの葉に果物などをおく。トウヤと近親者が新仏をまつる。

アラタナに近所の人がお参りに来るということはない。

盆の十四日 この日は、御詠歌をあげるくらい。

朝は、コウヤ、カンピョウを甘く味付したのと、ゴハン、お茶を供える。オガラでつくった箸をそえる。また、サツマイモを蒸して供える。

夜は、ゼンマイとアゲを甘からく味付してたいたものとゴハン、お茶を、オガラの箸をそえて供える。だしは使わない。

仏壇のすみの方に、無縁さんが帰ってきて食べるようにと行って、同じものを少しずつ皿に盛って供えておく。

盆の十五日 朝は、ナンキンとアゲを醤油味で一緒にたいたものを供える。

昼に、塩のハゼウオ（トビウオのこと）で、人間だけ精進あげをする。焼いて食べる。

夕は、サトイモ、シイタケ、ユバのたいたもの。

夕方、昔は花、お餅、菓子、ゴハン、おかずなどを半紙に包んでヘギの上のせ、さらにフロシキに包んで、港へもっていき、そこにオッサンがいていくらか包むと、経をあげてくれた。線香もあげてくれた。それから沖へ流した。

家を出てから港へいくまで後を振りむいてはいかん。港から帰りも振りむいてはいかんという。アラタナさんの塔婆も一緒に流した。帰ってから送り火をたいた。

ヤブイリ 十六日はヤブイリで、仏壇の後かたづけだけで休む。この日は地獄のカマのフタがあくといった。嫁と婿が嫁方の里へいく。これを盆の礼といった。

施餓鬼 二十二日お寺です。本堂のぐるりに棚をつくり、塔婆をたてる。新仏さんのある家では別に祀ってもらう。

おばあさんが、朝の八時には寺へ行き六十程の弁当をつくる。カマボコ、サトイモ、コンニャク、コウヤ、ナスビの酢あえと御飯で弁当をこしらえ、朝十時から参ってくる人に出した。

地藏盆 八月二十四日は地藏盆であるが、村の地藏さんにお供えするくらいで特別なにもしない。

愛宕講 八月二十四日に講員だけが、小さなお宮に集まり、火をたいてお祀りしてから食事をした。臨時に代参ということをしたが、その時は二十四日までに帰ってくるようにした。村には伊勢講は三、四組あったが、愛宕講は一組であった。

ポンオドリ 野田氏も伝え聞くだけだが、昔は踊りがあった。

豊作の年はしたが、不作の時にはなかった。二十四日までに切りあげてしまった。自分の所のが終

つたら、他所まで探しにいった。二十四日盆でアクをぬくといつた。

豊作の時には(今年は豊年だと見込んだら)、ハツサク盆といつて九月一日に、またヤグラを組んだ。これはよつぽどの年だけで、それを豊年オドリといつた。今年は豊年やろといつて、ハツサク盆に豊年オドリをしようと思つたら、大風がふいて中止になったこともあつた。

四 秋から冬の行事

ハツサク 九月一日はハツサクで、ヒルネの取りあげといつた。種つけからハツサクまでヒルネした。クリセツク 九月九日はクリセツクといつて、ゆで栗とみかん、柿をおやつに食べる。お昼に、アズキ御飯をたく(米とアズキでたいたもの)。

一般的にクリセツクよりあわせの着物を着るといふが、女は仕事がえらく、汗だくになるので十一月ごろまで、一重ものでいた。

ツキミ 九月十五日はツキミ。縁側に、ハギ、ススキなどの秋の七草と、ダンゴ十二コ(閏年は十三コ)、土イモ、ミカン、栗又は柿を台の上に供える。ダンゴはつまずにならべておく。その晩は、柿は取りほうだいで、子供が目をぬすんで取っていく。

彼岸 秋の彼岸には、彼岸ダンゴを仏さんに供え、墓へ花だけもつて参る。

寺で彼岸には、墓へ花だけもつてまいる寺で彼岸講座をする。

秋祭 九月十八日は氏神の祭。広田神社が氏神で、広田、中村、超水の三村である。宮さんで官祭と

私祭の二つ祭典があつた。拝殿へは宮、私祭とも氏子総代しかあがれなかつた。

氏子は、それぞれの方式で各家庭でチヨウチンをつり、村の四ツ辻と村の入口の二ヶ所にガクチヨウチンをあげた。御神燈と書いたチヨウチンを五つあげる。これはヨイミヤから。

ある一軒の家に村中の戸主が集まつて食事する。オトコ衆が、コイ親類にごちそうをよばれにいききる。

イノコ 十月の亥の日に、イノコといつてボタモチをつくる。家によつてどの亥の日にするかはまちまちであつたが、一回しかしない。

晩に子供たちが五人から十人位で、ワラをまいたしんこをこしらえて、家のカドで地面を「イノコ、イノコ、イノコの晩に重箱捨て、ひらいて見ればホコホコまんじゅう。にぎつてみれば十兵衛さんの金玉」といって、ビシャビシャとたたいて次の家へ行った。これは亥の日三回ともして、子供には何もしてやらなかつた。

コタツを、はじめてのイノコの晩にあけると災難にあわない。火災をのがれるといつた。

カマオサメ 十月のかけり、刈り入れがおわると、カマをきれいに洗つて洗い米をそなえる。

ダイコンを千切りにして、アブラアゲと米をたいたものを食べる。

広田神社の祭 十一月十五日は広田神社の祭で、四ツ身祭といつて子供に着物をきせて神社でおはらいをしてもらった。

料理は赤飯とサトイモをたいたものを食べる。

針供養 昔は、色々お菓子やなんかを買つてきて、針箱の上にかざつた。後でオシヨサンが、針を箱

に入れてどこかへ納めにいったが、どうしたか知らない。

話者

梶野忠三郎氏	明治三十四年生。
木本イノさん	明治三十三年生。
高地しめさん	明治三十六年生。
竹谷初恵さん	明治三十七年生。
中島きくえさん	明治三十九年生。
永井音松氏	明治三十年生。
野田三兵衛氏	明治二十二年生。
野田せいさん	明治二十六年生。
藤原伊之介	明治三十一年生。
古塚ちえさん	明治三十三年生。

第二節 遠州御前崎の年中行事

一、正月の準備 十二月に入ると山に入り、雑木や下草の刈り取りを始める。その中で、榊の葉のついた枝を適当な長さにそろえて、新ワラでたばねたものを三把作る。これは物置の屋根にあげて乾燥させておき、正月三ヶ日のお供え用の餅を煮る時に、毎日一把ずつ使う。

二、ススハライ ススハライは十二月十三日。ニメートル位で先に笹を残した青竹六本を、二本ずつ三ヶ所程新ワラにて結ぶ。一本を神棚に使い、二本は屋内のススをはらい大掃除をなす。終って各神様のお供え用の三方、家族各自の箱膳等を洗い清め、大根と鰯の生を塩と酢で味付け、これを大根なますと言うを作り神様には洗米、仏様には生花と水を供え、ススハキイワイをなす。

三、お飾り 門松は、学校役場郵便局等公共の建物ではするが一般にはたてない。家庭では、一夜飾りしないように二十九日までに新ワラ六本にて輪飾りを作る。上方には切紙、うらじろ、ゆずり葉を水引きにて結び、下方にワラのしん三本を差す。また神棚前に張る注連縄を作る。神棚、玄関の輪飾りは葉のついたダイダイをつける。二十九日に飾る。正月十五日にお飾りを下げ海岸においてドンドン焼きをする。

四、餅つき 餅つきは二十九日以外の都合の良い日に朝二時か三時頃より始める。まず各神様仏様にお供えする小さい重ね餅をつき、続いて大きな重ね餅を必要な数作る。あとはのし餅として新しい、ごごぎの上に置き、適当な大小必要に応じ切る。最後のうすはアンコを混ぜてし、各自の箱膳のふたの上に三本のワラのみごを敷き、その上にアンコ餅をのせ、みごで切って家族揃って年神様の方に向

つて礼をなし祝う。

五、正月一日主人または十七歳以上の男子が一人起きて、衣類をつけず裸にて井戸端に行き手桶に若水を一杯くみ、続いてつるべに水をくみ頭上より三杯乃至五杯かぶり身体を清め四方拝をなす。台所にいたり手桶の若水を置きハキゾメをなす。通常は奥より玄関に向かつてはくが、正月は玄関より奥に向かつてほうきを以って「金銀宝をはつこめ、はつこめ」といいながらハキゾメをする。続いて台所のなべに若水を入れ、十二月始めに用意した榊のシバー一把をカマドにくべ、神様仏様その他お供え用の餅を煮て三方に入れお供えし礼拝する。その後、主婦を起し雑煮を作り料理を台にならば家族を起し雑煮またトソおせち料理を揃え、年神様の方位に向かつて礼拝後一同祝う。午前中氏神様に代表者が参拝、近き親類または近隣等に礼服を着て年始まわりをなす。

六、七日正月 七草ガユを作り各神様仏様にお供えする。家族揃って祝う。

七、正月十一日 漁師のお日待ち。船主宅に舟子並に家族が集り漁業初めのお祝いをなす。翌日より漁業に出航する前祝い。明治時代より大正三年迄は和船のため、主として近海の鰹の一本釣りなるも、三月以後は黒瀬川が沖を流れるために漁が少ない。

八、正月十五日 冠儀を行なう。当年十七歳の男子が、明治時代は若い衆入りと云ったがその後は青年会が出来た。酒一升、米一升を青年会の集会所に持参し、会長にあいさつ。会長が全員に紹介して当日より一人前の青年となる。従って漁師職人共に、昨年迄は賃金等半額のところ本日より一人前を取ることになる。

九、節分 大豆を煎り神仏にお供えし、残りは一升ますに入れておく。前もってサンショウの木の皮

をむき、適當の長さの箸を家族数作っておく。塩鰯に麦飯を食べ、残りの鰯の頭を婦人の頭のすき毛とまぜて、釜敷きの板の上で箸でかきまわしながら焼く。箸の先に鰯の頭を差して便所、風呂、鳥舎、物置小屋等の入口に差す。これをヤイカガシと云って害虫退治のまじないとのこと。また、表の屋根に長いサオ竹をたてかけ、その先に一升カゴをかぶせゾウリ片方をつける。

十、伊勢参り(二月) 当地に漁船大小十五隻位あり。船主は二年に一度か三年に一度、また船を新造した時は当年に、舟子及び家族等の希望者、特に嫁入り前の女の子等一隻に二十人前後を乗せて毎年三隻位出航する。前日に氏神様に参拝、翌日朝早く乗舟、大正三年迄は風が少ないところをこいで、また帆をあげて遠州灘を二日位で伊勢湾に行き信者(カミヤシロ一港か鳥羽港に着く。御前崎より毎年参拝者が行くから両港ともに定宿がある。神社港は小田屋、鳥羽港は白金屋という。この宿に荷をおいて参拝するが、男子はほとんど舟にて寝る。参拝後は所々の見物をして帰り、村に帰着の翌日、船主宅に集まりお祝いをなして一同別れる。伊勢参りのみやげは一人前三銭の赤福であった。大正三年に沢入惣八ほか二名の三氏が四国の金比羅様参拝の帰路に大阪を見物、石油発動機の舟を見て、その時に大阪の清水鉄工場に行き発動機のことを研究、翌年六馬力と十五馬力の機械を買い今までの舟に据え付けた。これ以後、当地方の漁船が機帆船として近海漁業より遠洋漁業に進出する。

十一、三月三日 雛かざり、女の節供。二週間程前より祭壇を作り、生れたばかりの女の子のある家には嫁の親元より雛形を一对を子供のお祝いと贈り、また普段おもちやにして居った人形も全部飾る。女の子がなく男の子だけの家でも、家にある人形を飾り菱餅をつき白酒等をお供えして祝う。四日には人形だけ置いて後は海に流す。

十二、五月五日 端午の節供。男の子のお祝いで、庭内に長い竹の先に鯉のぼりをつけ、また吹きながしと云って、赤白の布で作った物も付けて立てる。また座敷には、座敷のぼり、金太郎人形やかぶと型等を飾る。しょうぶとヨモギをワラにて結び、玄関前の雨といの上の瓦にはさみこれを飾る。また、しょうぶを湯の中に入れてはいる。

十三、卯月八日 毎年子供連れでお寺に行く。お寺では甘茶を作り、色々の花をお釈迦様の像にお供えしてある。参拝しながら甘茶をお釈迦様の頭上へ小さい水さしでかける。家庭では特別のお供えはしない。

十四、盆の行事 八月七日に、朝早く分家の各主婦が本家に集まる。女竹で花筒を必要数作り、すすきの先を適当に切り落とし、それを持って墓場へ行き本家分家の墓とその付近を掃除して線香を立て帰る。なお行く時持つて行った物は、残っても持つて帰らず墓前に供えて帰る。

十五、盆棚作り 八月十三日朝から仏前に一メートル角位の台を作り、毎年使う仏壇用のごさを敷く。前もって、当地には無いから近き山村より売りに来た大きなはすの葉と、くきの乾かした物を置いておき、ごさの上にはすの葉を敷き、その上になすの適当な場所にはすのみきで四本の足を、頭の方に短く切って角として造り、また、白瓜に足を付け馬の型を作り、なすは牛、瓜は馬として前を向かして飾る。なす、瓜を細の目に小さく切り、牛馬の前にえさとして置く。夕方、タイ松草花線香を持つて墓に行き、タイ松をもやし線香をつけ、草花をお供えする。夕方、庭内の門口にタイ松をたき迎え火をとます。迎えダンゴを作り仏様にお供えする。夜十二時頃、家族揃って檀家寺に行く。お寺では近隣の寺々のおこぞうさんが集まり、施餓鬼のお経をあげている。各家庭は、此の寺内にお祈りして

ある位牌に水を向け参拝して帰る。翌日は、小坊主が各家々に読経をあげに来る。それ迄に草花、特にみそはぎとしきび、その他のお供えをする。ふだんはお供えに箸はつけないが、盆にははすのみきで作った箸をつける。お供え物はお迎えダンゴ、そうめん、また三度とも魚の入らない料理を供える。十五日朝早く盆棚を取り、敷いたござで丸め海に行きござだけ残し海に流す。初盆の家には親類からつりどうろうや廻りどうろうを、提灯をもって来てこれを飾る。近所の人が集まり念仏を唱える。終ってお茶や菓子を出して接待する。

十六、月見 九月十五日、座敷で月のある方向に机を置き果物と団子等を供える。

十七、秋祭り 秋の彼岸が過ぎると九月十五、十六日は氏神様の秋祭り。春祭りと異なり、大部分の漁師は出漁中につき、出店は出るが芝居やだし引きはない。

十八、送り神 十月には、各区ごとに学校に行く子供が集まり、赤竹を一メートル位に切り元の中央を先だけ割り、これをハタ竹という。バタバタと音がでる。当日、夜ふけに集会所集書、直径二十七センチ位の鐘を前後二人でかつぎ、後の者がこれをしもくでならし各家庭に参る。「送り神かんじ、何神かんじ、そうれい」「カンカン」「バタバタ」とはやす。各家々では、前もって用意した若干の金を包んでやる。この時一番年長者は後はちまきをして、しいの木に白い切り紙をつけたゴヘイをもって門にておはらいをする。

十九、別式 当地方には各区（六区に別れる）に区長がおり、金比羅講、御獄講、御山講と云う参拝団体の講がある。漁師をはじめ農家一同にてそれぞれの縁日に集まり祭壇を作り参拝をなし、当年の参拝者また他の希望者を決定する。

金比羅講は、白い行衣を来て金剛杖、笠、鈴を持って四国の金比羅神社に参拝する。帰路、大阪見物等をして約一週間位費やして帰る。

御獄山も同様行衣を着て金剛杖、笠、鈴を持ち、名古屋より中央線にて木曾福島より御獄山にのぼる。ふもとの神主宅に一泊し、翌朝早く山中の雄滝、続いて雌滝に行き何れも滝に入り体を清める。その日は山の中腹にある初解山の宿舎に仮宿して翌日さらに五合目の仮宿舎に宿り、朝早く打上の御嶽神社に参拝、近くの一の池、二の池の水にて顔などを洗い、前もって用意した酒をびんより池に流し、池の水をびんに入れ持ちかえる。下山は登山と同じ道を下り鳥居峠の下方にある神主宅に寄り、お守札を戴き名古屋に宿り名古屋城等を見物して帰路につく。

大山神社参拝は、大山山ろくの神主宅に一泊し翌日神主の案内で神社に参拝旅殿に宿る。翌日朝早く御殿場より富士山にのぼり、高い所より駿河湾、三保の松原、久能山また自分達の村を眺め下山帰路につく。

前三社参拝とも、帰った翌日ゾージと云って酒盛りをして別れる。旅費は大部分講の積立金でまかない、小使いは自分持ちなり。

話者

澤入由次 明治三二年生。

第三章 その他

第一節 滋賀県甲賀郡土山大河原町の生業

一 炭焼き

大河原の生業の主たるものの一つに炭焼きがあった。燃料関係の改善で炭が使われなくなってきたので、炭焼きは十年前位よりやめになった。

炭焼き用材の伐り出し 炭焼きを行うには、一山単位で雑木を伐採する。昔、山は個人々々が持っていたが税金が反別割りであったため、収入がないのに税金をとられるという事があったので、特定の持ち主に集中した。現在は、十人余りの村人、金原財団、名古屋の加藤氏らが、山林所有者である。金原財団というのは、治山・治水に貢献した静岡の金原明善氏が設立した治山・治水のための財団のことである。

共有林として、鮎河村財産区と、大河原部落財産区がある。旧鮎河村で個人の持っていた山は、県の造林公社とか営林組合が借り上げ、大阪の田中庄次氏の持っていた山林は、営林署が昭和三十年頃買い上げた。

炭焼きを専業でやるには、年間千俵(四千貫)焼かないといけなかった。

木の根を切るのには、ヨキと呼ばれるものでウケ口をつくり、反対側からノコで切っていく。五本から十本切ったら、さらにそれを一メートル五十センチに切っていく。このことをアイギリ、又はカマギリという。この時に枝があれば、越前ナタで払っておく。

伐採された雑木は、その山にある木材の落とし道（オトシ）へ集められ、炭焼き小屋へ戻る時に木の尻をめくりながら、オトシの集中したサコという所まで落としていく。ここに三〜四日もすれば切った木がたまる。それを窯の横にもつてくることをキゾロエといい、女の仕事とされた。

製窯法 大河原に伝わる窯は、在来窯とこれを改良した大正窯、天井に鉄板を用いた鉄板窯がある。

在来窯は、丸型のもので、長さ・幅とも十尺で、たき口と木の入口が兼用になっており、ケムリダシ（煙突）から火が戻ってきて危険なため、大正時代にこれを改良した大正窯が、県の指導で使われ出した。大正窯では、一回当たり五十俵より少し多く焼けるが在来窯では、一回当たり五十俵以下である。

窯作り 窯を作るには、仲間の人七〜八人に手助けをたのむ。その場合、手間賃ははらわずに、自分の手間でかえず。山によつては古い窯を利用して炭を焼く。三十〜五十年で古い窯をまわる。

窯のぐるりは石で積み、裏は赤土でたたきこむ。下も赤土でたたきこむ。ちょうど、窯が火消しつぽの役目をするようにする。次に木を立てる。木は太い方を上に、細い方を下にする。炭になれば、上の方がよく焼けて、反対になっている。木の上に細い雑木をのせて丸くする。このことをナラシという。ナラシが済めばムシロをひいて赤土をのせる。その時すがあつく、天井がうすくなるようにする。そして、かぶせた土を木のツチでたたく。これをハチアゲといって、七〜八人で三時間かかる。現在は鉄板を使用する。ハチアゲが済めば、窯に火を付ける。中一日燃える窯もあるし、中二日燃える窯もある。風の状態、木の状態によりカラダキを含め十日かかる。火はナラシがすぐ燃えないようにゆつくりたく。これは土が乾かないうちに、ナラシがもえてしまうと天井が落ちてくるためである。土の悪い所は一パイ（回）焼いたら天井が落ちる。

鉄板窯は昭和十年頃より使われるようになったが、これは木を組んで、針金で金網をつつた上に土をかぶせたものである。ハチアゲの仕方向かい合わせになって、交互に模様になるようにたたいていく。模様は木の槌で少しずつ間隔をおいてたたいていくことによつてできる。

ハチアゲを手伝ってもらった人には、昼にぼたもち・魚・おみきを食べてもらう。ハチアゲが終われば、窯の屋根だけして帰る。

窯ができて、炭が始めて出るのには一カ月位かかる。

窯の条件 窯の石は、はぜん石・花岡岩がいい。山地であるため、横窯はあまりよくない。窯の位置はサコ(谷の集中した所)より少し避けた所にする。これはサコに作ると、水が湧くからである。山では特定の場所では窯が作れないことがあり、その場合は悪い窯ということがわかっていても焼いた。いい窯というのは、何年炭を焼いても、焼いてみなければ見分けられないそうである。

製炭法 キゾロエに集められた雑木を太い方を上にして窯の中におく。窯の奥にはカシ・ナラとかいう上質の炭になる木をおき、その他の雑木を窯の手前に立てる。太い木は適当な太さまで割る。窯に詰められた木は、マツチで火を付けられた杉の葉で松に火を付けあぶる。夜は二十センチ位の木を口いっぱいのにせておく。木が乾くと、窯口でたいている火で自然に中の木に火が付く。すると、横でくべていたものを立ててくべる。木が炭化された所で、煙出しにもふたをし、火消しつぼの役目をするようにする。このことを口をコメルという。この間に女性はキゾロエをし男性は窯のまわりの木を切る。二日位すると火が消えるので、炭を出し木を立てる。このことをタテカエという。窯がさめないうちに次の炭を焼くと能率があがる。火を付けて口をコメル間に炭を俵につめる。

三丈の丸い窯で百二十貫一度に炭ができた木種がよいと多くとれる。十日で一回、月に二回の割で、年間四百〜五百俵焼くのが平均であった。大正頃は四〜五人家族で、一日米三升買える賃金をかせいだらいいといわれた。

煙がカロクになってきた時炭ができたといわれる。又、ケムリダシの所にヤニ棒といわれる物が二本入っており、その棒の状態が中の炭の状態を示す。ヤニカゲンには五段階あり、それぞれ次のような名前が付いている。

シヨウ油―醬油みたいな色になってペタンペタンと落ちる。

ベタヤニ―ベタベタのヤニになる。

糸ヤニ―糸状のヤニになる。

ヌリバシ―ヌリ物みたいに棒がある。

ブク―赤さびみみたいな物がつく。

又炭を十パイ位焼いた所で土管掃除をする。ケムリダシの下で火を付ければ、土管に付いたヤニが、ゴーツという音をたてて燃える。

炭の種類と材料 炭の種類には黒炭と白炭があるが、大河原では黒炭を主に生産していた。炭の材料としては次のような物がある。

マツ―炭にしたものはカジヤ炭とも呼ばれ、ふいごの炭に使用された。炭を作る時にあぶる木として使用される。この木をクツタキという。

カシ―上等なのでカシだけ集めて別の俵につめる。

ナラ・クヌギ―カシに続いて上等

ツバキ・カワダチ・ハリ等―雑木炭として区分される。

炭俵 一俵十五キロが標準とされる。カシ炭は重いので普通の炭を入れる俵に入れると、二十キロ位入ってしまったので俵を縮めた。カシ炭が多い場合、別に俵を編んだ。炭は一尺ずつ先端の方から切れ、残った分をキジリといって家庭で使用した。俵はカヤで作る。

俵のつめ方は四角い底のない箱の外にカヤで編んだ俵をかぶせ、底の部分には柴をひいて、炭をつめていく。ふたは炭と直角に柴をやり、縄を井の治にかかるようにして作る。

ふたが出来れば反対にひっくり返して後半分つめてふたをする。できた俵は炭焼き小屋においてあるさおばかりで、風袋入れて四貫三百匁になるようにきつちりはかる。

二 狩猟

仕事にしている人もいたが好きな人が行なった。獲物はシカ・イノシシが主で、ヤマドリ・ウサギなどは打つと他が逃げるといって帰り道にしかとらなかつた。昔大河原にいた猟師は二人で、他は三重の方から狩りの期間きた。猟師は四人は必要で、六く七人で一山カケタ時代もあった。一山、二山とは一回、二回のこと、一山半日かかった。方法今日では車・鉄砲が中心であり、方法は変わってきている。狩りをする家では犬を五匹位飼っている。猟犬は紀州犬がよいとされるが、小さい時から飼うと雑種でも覚える。

まず、キリマワシといって、一山を大きくキツテまわる。キルというのは分けることである。そして、雪に残っている足跡で、どの部分に獲物があるかをみきわめることで、半日位かかった。その時、足跡から何匹入って何匹出ていったかを計算する。これは足跡から獲物の種類、例えばシカ・イノシシの区別、雄か雌か、大きさを割り出し、現在山に残っている数を計算するもので、何年も猟をやっていないとこの勘定は難しい。

キリマワシがすむと、獲物の出てきそうな所に鉄砲を配置する。この場所のことをマチバといい、よく出てくる所に優秀な人を配置するようにし、セコという動物の追い役が十五から二十人位で、鉄砲のあるマチバへ動物をおいやる。このことをイノヲカケルという。森本善平氏は昭和六年よりセコをやった。

もっと昔は、竹をとがらしてイノシシなどにつきさしたという。反対にイノシシのキバでけがをした人もあった(上野忠嗣氏談)。

イノシシの通る道はゴウといって決まっております、道の上にいると危険な目に会うので、ちよつと道はずれて声をあげて獲物を追う。獲物は猟師もセコも均等割りであったが、猟をする冬は大河原の人は遊んでいたもので、分け前をもらいに十五人〜二十人もセコで参加するようになって、歩合制になった。この時、いい犬も人数に数えられた。猟は行きだしたら正月から三月位まで、ずっと行かないと損である。獲物のとれない日があっても平均されるので、結構やつていった。

肉は鈴鹿峠の山賊茶屋から買いに来た。現在は三重のポタン肉専門店が買いにくるが、カシワと変わらんということである。イノシシの肉の方がシカよりも高い。シカも頭のいいのは飾り物に使用で

きるため値が高い。現在の収穫は一シーズン中にシカ三十五匹、イノシシ二十五匹位である。

履物は、長ぐつの前は、ショウガグツというわらで作ったスリッパのカバーみたいなものヘクピ・ワラジをはいしたが、わらのすき間から雪が入るので凍傷になった。ショウガグツは、靴の形がしょうがの形に似ているので、そういう名がついたのであろう。また獲物の霊をなぐさめるため、寺にグループで一万円位持って行って、供養してもらおうそうである。

三 養蚕

信用組合でたねを買い、寒倉にあるトンネルの中で保管しておいた。

福本藤次郎氏の本家では桑畑をやっていた。桑の芽がピツと出た位で、蚕の種紙を出してきて、桑の新芽をふりかける。たまごから出て来たら一センチ位の虫で、繭をつくるまでに四へん皮をぬぐ。桑の新芽を食べなくなり、蚕がじつとしていることを「蚕が寝ている」と言った。寝て起きると、一皮ぬぎ、大きくなってまた桑の葉を与える。荒う切って葉をやる。五日するとまた蚕が寝る。また、皮をぬぐと大きくなっている。繭をする前の蚕をアガリコといい、アガリコをわらのツト(巢)にふると繭をつくる。五日位すると繭ができ上がり、繭買いが買いに来た。蚕を飼っていた半分のむしろをカイコムシロ、蚕を清潔な場所に移すことを「蚕のシリカエ」と言い、使っていたムシロを干して、次のシリカエに使った。繭がとりやすいようにムカデというものがあり、それを使うと一度に多くの繭がとれた。一つの繭の中に二匹入ったものを「ボタマユ」といい、値が安かった。

養蚕を行なった時期は、福本とめさんと九つ違いの兄さんが十八く九歳の時から、福本藤次郎氏が二十七歳位までであったという。

四 その他

お茶 昔、山には茶園畑があった。しかし茶には味・銘があるし、芽が出るのが遅いので値が引き合わず、だんだん作らなくなつた。値が合わただけでなく、霜にやられるので木を植林した方がいいといつて、茶園畑は植林されていつた。

お茶をやっていた所では、一貫二百をパイといい、五ハイを本茶に仕上げるのが普通である。本茶に仕上げる作業をシナモミといい、えらい仕事だったそうである。茶をやる家では朝は二時から三時起きであつた。

茶をつむ人をツミコといつて女性で、大河原にもいたが、三重県から多くきた。つんだお茶を茶に仕上げる男の人のことをオチャシという。

木びき 大正の頃には五く六人いた。現在は数名いる。

稲作 大河原では米の出来が悪く、一反に四く五俵位しかとれず、自家用でしかも冬の分位しかなかつた。

水のつかん田んぼをアゲタ、水の深い田んぼをサワダといい、八く九割が後者であく。深いのになるとひざ以上つかるそうである。稲刈りなどは取った稲をぬれない所まで持つていつて、次の稲を刈

らねばならなかった。アゲタは山に多く、現在では植林されてなくなった。「労力の割に収穫のない田んぼでんなあ」と言われる。

昔の稲の種類は「欧州」（これはひげがあり穂が出るのがそろわない）であったが、氷を割って稲刈りが行われることもあった。稲刈りは十月二十日から一カ月位かかる。ひげのない「ボンサン」という種類では収穫がもっと遅くなる。霜月の十九日にしまえたら上出来だった。農作業がすべて終わったことをムシロタタミという。モミスリもムシロタタミ以前にし、この時は山には行かなかった。モミスリは、女五人で二十バイ位のもので、全部手作業であった。

稲の干し方はハサボシといって、三本の木で段々にした所にひっかけて干す。これは大河原ではイノシシが出るのでイノシシの届かん所に干した。稲をひっかける木のことをハサギといい、ハサギへかけることをハサガケといった。

サワダにはミツウチという三本歯のワクを使用した。田植えには大河原の牛車の牛も使って田んぼを耕した。牛は鮎河からも応援がきた。田植えをするのは女だけで、ウエコといい、その時は男は女に雇われた。牛のすいた後始末を男がワクとするのをウエゴシラエといい、非常に忙しい。男のウエゴシラエと女の田植えは同じ料金であった。ウエゴシラエが済めば男は苗くばりをした。牛一頭は二人分の働きをするものとされ、牛の持ち主は三人分の賃金をもらう。

田植えを手伝った人には昼食と酒を出した。牛には麦の炊いたものに糠を混ぜわらを入れた飼料を出した。このことをクチヲアズケルといい、牛のことをヨバレウシという。

苗代の特別な行事はあまりやらなかった。

田植えをする直前に田の神さん祭りともいうものをする。これはみそ豆・いり豆・米いばら、いり米を田の水のトリイレグチ(取り入れ口)におく。いり米は水につけたもみをあげて、石臼で皮をむいていったものである。

特別な田植え 若宮神社の田のことをハツホデン(初穂田)といい、宮さんの責任者が管理する。田植えは女性が行うものであるが、初穂田に限りシャチューと呼ばれる男の人六人が、ノアガリの日に限って行う。昔は子供が行っていた時もあるが、その時も男の子であった。

米の種類は正月のモチツキ用のため餅米を植える。種もみはワキガンヌシが作り、種もみゴキトーの日というのがあった。

初穂田は水が最初にくるユガシラという所にあるが、一番最後に田植えをする。田の形は長方形で、四方に笹を立て、注連縄をめぐらした中で田植えをすく。下肥もやってはいけなかった。

お宮さん(若宮神社)の田は五反ちよつとあったが、農地改革で一時全部とられたが、福岡誠治氏の努力で、地方にいる人などに連絡をとり、ヒトフデ(一筆)ずつとり集めた。現在は二畝あり、境内も昔は田であった。

農耕具 スキはあったことはあったがクワを使う方が多かった。その他にミツウチ・カラスキ・ヨツマンガンを使った。ヨツマンガンは四本足で、カラススキのかからん所とかあぜつけに用い重いものであった。

農耕具は農協や関で買ったこともあるがだいたいは日野で買った。また、ノアガリが済むと、日野からカマを修繕するかめ取りに来てくれたそうである。

豆 田のあぜには、豆を植えたこともあった。この豆のことをアゼマメといい、炭俵を運ぶ時に使用する女性の杖で穴をあけ、三粒入れ土をかけて植えた。しかし、豆は株が大きくなり稲に影響した。そこで、「豆より米がだいじなのでやめてしまった」そうである。また、サワダの場合は亀が、ヤマダの場合は山鳩や兎が豆を食べ、労力ばかりかかった。

漁業 ダムができる以前は鮎が一里や二里はのぼった。縞にあった色の黒いアマゴも多くいた。それをせみとりの網の大きい物をもって川の流れを追って行き、岸の方においてあるタデに追い込んだ。また鮎はトモヅリ、又はトモガケとっておとりの鮎の鼻に針をひっかけてその尾に針がついているものを使用した。またヒツカケと呼ばれ、竹製で川をのぞく鏡があるもので、深い所に入りひっかけた。

たにしをつぶして、米ぬかをいって、田の土とねった物でどじょうをとったが、農薬でさっぱりである。うなぎはツルツいうてすべるので長い長い糸を手で巻いて、岩の穴から出てくるのをつかまえた。夜釣る場所をナガシバといった。

根こそぎ魚をとることは聞いておるが、やっていないそうである。毒ではないが川がまつ青になり一キロ位あわだらけになり、瀬に残ったらきたないし、世間が怖かった。一時的に魚を酔った状態にする物を用いたということである。

鉱業 マンガン鉱がとれたそうである。川船でマンガンを運んでいたが、日野の売薬製造元である山田弥三郎氏が鉱山からサク道で出すようにし、大河原から牛車で運んだ。

運搬業 運搬を専業にしている家が牛車を持っており、そんな家は五々六軒あった。

生業暦 一月三日頃に窯祭りといって、男性が御神酒とお供えをもって、炭焼きの窯の所へ行き飾ってくる。二月六日は山の神講が村全体である。四月に苗代、五月の節供後に田を耕して田植えをした。六月一日は水神さんの祭り、水に絶対入ったらいかん。その日はサギも降りんといわれた。田植えの作業もこの日は中休みである。時期を同じくして、茶と養蚕が行われる。茶をする家では茶をしてから田植えをした。また、田植えをしてから茶をするのを二番茶という。田植えの終わりの日をノアガリという。そして、水をみて一番草・二番草・三番草をとる。草は実際にとるのでなくて、田の中に押し込む。三番草をとる頃になると穂が出てくる。「こんな所に入ったら穂があかんからやめた」といって草をとるのをやめた。草をとることをエン草刈りともいった。山の方では夏季は下草を刈ったりしている。そして、九月二十七日の若宮神社のミヤオクリの後稲の刈入れをする。炭焼きをしている人は雪が降る時分に作る。一〜三月は家で遊びといわれ、その間に縄をのうたり、俵を編んだり、わらじを作ったりする。猟の好きな人はセコで分け前とりにいった。炭焼きは家族単位の仕事で、男は山へ行き、女は家で俵を編んだりする。

一月三日 窯祭り

二月六日 山の神講

三月 なし

四月 苗代・茶・養蚕

五月五日 節供・月末から田植え

六月一日 水神さん・二十日ノアガリ

七月 下草刈り(一番草)(二番草)

八月 下刈り(三番草)

九月二十七日 ミヤオクリ後稲刈り始める

十月 昼稲刈り・夜モミスリ

十一月十九日 スズワタシにムシロククミが終われば上出来であった。

十二月 炭焼きを始める

運搬 俵につめられた炭は炭焼き小屋にいったんおかれ、女性はセタというもので二俵背負って村まで帰った。それまではセオイナワであった。男性はニメートル位の木の棒に、前一俵・後二俵のせ、キジリという物で重心をとるようにする。男性も女性も、一メートル位の杖を使用し、休む場合荷を降ろさずに、それに重心をかけた。この杖をイキヅエといった。ダムができるまではこうして炭俵を運搬していた。村から日野へ運搬する場合は牛車を使用した。トラックが使われるようになってから、道路まで炭俵を運ぶだけで良くなった。

鮎川との道が良くなったのは、ダムを作るためにトラックが入れる道が必要だったからで、昭和十三年頃から工事が始まった。それまでは車といえど牛車であった。

炭の運び屋をニンモチといい、女の人で、奥で焼いている所へもとりに行った。一俵五〜十円の手間賃で、日野や土山へその人の才覚で売りにいった。専門にしている人は、二〜三人いた。

炭俵を運ぶ時に雨・雪がふった場合は油紙・ござをかぶせる。

大河原から武平峠までの道には次のような名がついていた。オリト・サブクラ・落合・ホウガセ・

川のオリ・黒谷口・金山・サブソウ・オボが谷・大納言・スリガヒラ・クツクク・ケンリ・ブヘヤシキ・峠である(福本藤次郎氏談)

福本とみさんのお母さんは「大納言あずきをすりつけて、スリガヒラ、一つ食いたやオボガ谷」と歌っていたそうである。

森本善平氏は、オリト、サブクラコシゴエ、カミノオリト、クロタニグチ、ヒウチバ。落合から別れて高橋、下畑と言われた。

大川原から日野へはフキアゲ、赤坂、コゴセ、平子、蔵王、乙羽、西大路という名がついていた(福本藤次郎氏談)。

日野方面に行くには、川を渡らねばならず、簡単な橋がかかっていたが、水の出た時は橋が流れてしまい、日野へは行けなかったそうである。ハシカケは青年団の仕事であった。

五 交易

炭 大河原で作った炭は日野で消費した。土山へ持っていくと値が少し高い。これは日野には多くの問屋があったからである。

米 昭和二十五年位までは反収三俵位で、自分の家が冬中食べる分位しかなかったので、日野から米を買入れた。

茶 三重県に茶をしに行ったり来たりした。

魚 伊勢の白子や白塚から鈴鹿峠を越えて、自転車で魚・いわしを売りに来た。他に日野からツンボという人がニシンやシャケを、関からアカオビという人が売りに来た。昔は、村に魚屋があり、毎日日野へ仕入れに行った。普段はフリウリと呼ばれ、乾物ばっかしだった。大河原は鮎河より「はしが高い」と言われた。ぜいたくだと言う事である。

こんぶ 丹後の宮津から売りに来た。

塩 日野から吠で四く六貫買って来た。

油 日野に油屋があつたので、そこで買った。黒川からも買った。

山林道具 越前から毎年一回寒い時に一人で売りに来た。代金は一年遅れで良かった。

カジ屋 黒川のカジミツ(光)、蔵王のカジカク(角)があつた。

薬 彦根から来たのはコンゾという女の人、富山からはオツチニイといい男性が来た。「ひび・あか切れ直るぞ」と言つて売り歩いた。富山のコウカンドウは熊野にも来ていた。昔は村にも薬屋があつた。

竹類 茶摘み前に売りに来た。

材木 木を筏にして鮎河まで流した。鮎河から白川・泉・土山・大野と大きくしていった。

医療 死ぬる前になると大河原に医者はいなかつたので、日野からかごで医者を迎えた。

第二節 池田市細河の産育・婚姻

一 産育

妊娠　妊娠がわかった時の祝いというのは特になかった。妊娠がわかった時に、誰に告げるということも決っていない。

ハラオビ　妊娠してからの行事というと、中山さんにハラオビを受けに行くことはした。五ヶ月目のイヌの日に巻くということ聞いたことはある。中山さんには実家の母と行くということはなく、主人と行く。また、自分が行かずに主人だけが行くこともある。受けて来たハラオビをして、子供が無事生まれてから、新しいオビを文だけ買って、受けたのと一緒に持つてお礼参りをする。

妊娠中の食事　子供が生まれてからはなんでっけど、生まれるまでは家の人と同じように食事していた。特別に変わったことはしない。

妊娠中の仕事　こちらの人は、妊娠したからというて体を使うようなことはせんということはなく、何でもした。たんぼの仕事もしてるし、妊娠してるからというて、別にこの仕事をしたらあかんというようなことは全然なかった。何でもしました。

妊娠中の禁忌・俗信　そんなんは何も聞きませんでした。とにかく仕事は何でもしました。お腹が痛くなるまで、出産ぎりぎりまで働いていた。元気な赤ちゃんが生まれるように、お参りをしたり、祈願をかけることはなかった。妊娠から出産までの間は、中山さんのハラオビのことはしたが、他に

は特にするとはなかった。

サンバサン　　いよいよお腹が痛くなってきたら、私（うち）らの時は家でサンバサンに来てもらって出産した。私の時にはこの村の人ではなく、キノベという向いの村から来た。私らより前でしたらな、子供を生むときの世話は、村の普通の人でちょっと器用な人というのんか、上手な人がしてくれた。私らになってからは専門のサンバサンがよそから来た。

出産　　私の母親の時は座って生んでいた。私の兄弟の末っ子を生んだ時は、きばるためにオコタのようなものを抱くようにして座って生んでいた。私の場合は、寝て生んだ。綱かなんかを握ってきばって生んだ。

今は寝て生みまっしやろう、そして生んだ後も寝てますやろ、しかし私の母親の時は、生んだ後もモタレといってワラを入れてあったのか袋を背中にして、生んだ後もたれて座っていた。悪い血が降りるようにならうといた。私の時はこの様なことはしなかった。

お産して後に初めて自分が起きて立つのは、男の子の時は六日目、女の子の時は七日目と、そんなんでした。母親の時は、その間もたれて座っていた。

出産後の食事　　私らの頃には、何でもなに食べてもええねんといいましたけどな、昔は、何食べたらいかん、か食べたらいかんとういいます。芋のズイキを食べると古血降ろしにええねんといって、子供を生んだあと、血が、古血が降りてええねんといいました。ほんで、おもにズイキでも、生でとった時のものではなくて、干したのがありますはな、あんなんを食べた。これは食べなあかんように食べた。

食べてはいけないものは、ノリを食べてはあかんということは聞きましたなあ。せやけど、それから後に聞くのは、そんなことはない、お寿司食べてもどうもないいうて、私らの頃はサンバサンがどんなんでも食べてもいいといひりました。

難産　昔は、お産で亡くなる人もありました。今ではそんなことはないですやろ。私は家で子供を生みましたが、私らの子供は、病院で生まれました。難産の時に、どこかの神さんとか仏さんに行ったらええということは、聞いた事がない。私はあんまり重いようなお産してないからねえ。

ヘソノオ・ノチザン　ヘソノオはサンバサンに切ってもらい、ノチザンなどは別に包んでおいて、お墓かどこかへ持って行って始末したんと違いますか。墓地は奥の山の中にある。家の主人が持っていった。ヘソノオは落ちたら残しておいて、しまっておく。

ウブユ　ウブユはサンバサンがつかわしてくれはる。子どもを先にして、きれいにして寝かしておいて、あと親を見てくれはる。

私らの時にはそんなことしてもらえなかったが、私の母親の時には、お産の世話に来て貰った村の人が、たらいの中にお湯を足して産婦の手を入れてよう揉んでくれる。手を揉んでもらって足もして、肩かて首かてえらい揉んではったけどね。私らの時は、そんな揉んでもらうことはなかった。

村の人の時は、体全体を揉んで貰い、乳も初めての子の時は堅いので、えらい柔らかうなるまで揉んで、子どもが飲みやすいように吹いつきやすいようにしてもらった。初めての子は苦労して、お乳を吸わしたりしますやろ、せやから肩もこるやろさかい、腰掛けに腰掛けて足をたらいに入れて、足も揉んでくれていた。

このことなどは、村の人の時のほうがよろしました。サンバサンになると、こんなことまではしてもらえなかった。村の人の時は器用な人を一人に頼む。こんな人は免状もなにもない人で、昔の人ですきかい。

ナツケ　赤ちゃんが生まれたら名前をつけなあかん。私らの時には二週間以内とか決まっていたけど、せやけど、昔やったらきっちりしてなかったのとちやいますか。遅れて籍を入れてる人もあったし、私らの頃になったら、決ってましたやろ。

名前の付け方は、おじいちゃんやおばあちゃんの名前から付けるとか、ようそんな家もおますなあ。まあ、そんなこといわずに、呼びやすい名とか、なんとかいうて、字の吉し悪しをいうて付ける人もあったし、自分の子供はいいやすい名前をといつて付けました。

私の最初の子供の時は、男の子が生まれたので、私の清枝（きよえ）から一字をとって清志にしました。後の子どもは、村の近くにもあんまりない名前と字でいうて、おんなじ名前付けてもいかんさかいというて、変わった名前を選んでつけましたけどな。だいたいは夫婦で相談して決める。

タチビ　出産の祝いとしては、赤飯を炊くのはタチビいうてな、子ども生んで七か目か六か目か、そんな時にしました。

赤飯やらを親戚に配りましたで。これは嫁ぎ先ではなく、私らは実家で用意しました。ほいでな、私らこの村は、今みたいにこんな広いことはなかったが、それでも百五十軒ぐらいはあったんでつしやる、私らの時には。それが、お餅とかオマンジュウとか、ちよつと大きなのを餅屋さんからしてもらつて、オマンジュウの家もあるし、お餅の家もありますけどな、そんなんを紅白二つずつ入れてな、

村中に配った。

このことは私の家では、長男の時だけしましたけどな。私の家では、後は女の子やしな、それは覚えていますけどな。お餅の箱を沢山積んでな。

出産の場所　子供を生んだのもここではなく、私の親元で生んだ。私は同じこの村で嫁いだ。私は兄さんと二人兄弟で、その兄は海軍で兵隊でいつもいやしません。それで、私が出ると家が寂しいんで、結婚してからも親元にいた。

子供が生まれてからも、その子が一年になる位の時に、兄さんも帰ってきておったので、子どもを連れてこっちに來たんですわ。それまでは親元におりました。主人も兵隊に出ていた。兄も主人もどっちもいてない。主人は、召集でも三回か四回受けてました。私の兄さんは、海軍やさかい、行きっぱなしや。主人は陸軍やから、帰っては行き、帰っては行きになってましたけどな。

二人目からの子供は、そやないかも知らんが、初めの子どもは皆親元へ生みに行きますはな。名前のおひろめ　タチビの時には、もう名前が決まっています、餅とかマンジュウの上の表紙に名前を書いておひろめをする。

ほいで、赤飯はそんな村中せえしまへんけどな、ほんまの親戚やらねお祝いを貰った家だけにする。

厄年の子　厄年に男の子が生まれたら、箕に入れて四つ辻にほかすとかいいまん。そして近所の人に頼んで拾ってもらう、と聞いたことがある。私の時は厄年とは違ったが。

ウブメシ　ウブメシは聞いたことがない。

便所の神　赤ちゃんを生むときにお便所をきれいにするとか、お産の時に便所の神さんが助けをす

るとかは聞いたことがない。

産後の仕事　　タチビで産婦は産後初めて立つが、まだ仕事はしなくてぶらぶらしている。おしめかえたり、そなえらい仕事はしませんな。

せやけど、昔の人は、赤ちゃん生んですぐに、唐臼でお米踏んでな皆に食べさせたと聞きますけどな。私らの頃はそんなんは知りません。

産後の禁忌　　産後、火を使ったらあかんとか、神さん詣でしたらあかんとか、何はしたらあかんとか、いうことは聞かない。

宮参り　　お宮参りはします。あれは三十五日にしますねんやろ。ここは村の神社に行く。実家の母親に産着なんかを買って貰って、実家の母親がついて行く。額に男の子は大とか女の子は小とか書く。額に書く印の名前は知らない。男の子も女の子も三十五日にお宮参りをしたように思う。

主人が兵隊に行っていたこともあって、私の家は何でもあんまり行事をせんほうや。私らの頃は子どもが生まれると、そうやって物を配ったけど、今は全然そんなことはあれへん。

百日の祝い　　百日目の祝いは、特に行事の名前はないが、かたちだけ、米を一粒だけ子どもに食べさせる。このことも、あんまりきつちりはしない。

この時に、河原から小石を拾ってきて子どもにかませるとかは聞かない。

節供　　セック、それはいいますわな、女の子にはオヒナサンやら、今は新暦ですが、前やったら旧で、女の子にはオヒナサンを買って、男の子には五月の人形を買って、コイノボリもして、そんなんしました。私の末っ子の時は、広い家に住んでないのでコイノボリも小さいのですけどな、前の

上の子どもの時は大きなコイノボリを買って人形も買った。これは、皆んな里から持って来る。初めての男の子の時は、庭に大きなコイをあげて家の中は鎧甲の五月人形を飾りますけど。

オヒナサンは早くかたづけけないと、嫁に行くのが遅れるといえますな、そんなこと本当（ほんま）でつかいなあ。ここらかつて、そういうことはいいいます。せやから、あれは早くかたづけなあかねんといえます。飾るのはちよつとの間ですな。男のセツクの人形にはそんなことはいわない。

初正月　子どもが迎える初めての正月に、特別なことをすることはしない。

初誕生　誕生日は、何かちよつと御馳走をすることはあるが、そないに普段と変わりはない。長男の初誕生の時も、私の時は、赤飯を炊いたり餅をついたりすることはなかった。

夜泣き　子どもが夜泣きしたら、ここらは牛のクツ（藁で作った）を家の屋根をこさしたらええのんやと聞きましたけど、本当にしたことはない。

地藏など　子育てにご利益のある地藏などの神仏は特にない。

疱瘡　私の子どもの時は、疱瘡の予防接種はしましたな、肩に四つしました。

今は村にお医者さんはなく、池田まで行くが、昔は森さんというて漢方のお医者さんがあった。あそこはよろしましてん、今は皆亡くなってはるし、世取りさんが兵隊で戦死しはったし、その人の奥さんがよろしてはったけど、檀那さんが亡くなってから実家に帰りはったし、今は全然お医者さんのけはないんです。

流産など　流産とか水子のごとで特に何かすることはしない。

七五三　七五三というのは、昔からいうんでつけけど、昔はそんなことはきっちりとはしてないは

ねえ、ここらは。私の長男の時も、さあ、七五三には行ってないやろねえ。名前は聞いてるけど、連れて行くことはなかった。

年祝い　何才になったからとの祝いは特にない。フンドシワイはしない。

一人前　一人前になるというのは、昔はお祭りになったら、太鼓をかいてな、そんなことはしました。青年団に入ってから、お相撲やる時分は村でお相撲もありましたし。

青年会・処女会　女の人は、学校でたら処女会に入る。小学校六年生という人もあったし、高等科行く人もあったし、まだ裁縫学校（細河にあった）行く人もあったし、それはいろいろでしたけど、学校でてから入りましたけどな。処女会で何をするといいこともないが、女やったらコオドリに出た。集まる場所は、会場は青年会と処女会は一緒にあった。昔から青年会場とあってありました。今はない。行事の時だけに集まる。その青年会や処女会に入っていると、村の若いもんやということになる。

ほんで、男の人は祭りの時にお相撲をしたり、そんなんは昔からありましたなあ。それが何でか、つぶれましたなあ。処女会は結婚したら抜ける。青年会や消防の人は、年が決っていて、その年になつたら入り、またある年になつたら出る。

盆踊り　盆踊りは賑やかでした。そら、丸でも三重にまわって。昔は産業会館の前で盆踊りをした。場所が狭いくらいに人が出た。ここは、盆踊りは三日間、八月の十四、十五、十六日にした。

地藏盆　地藏盆はここらは別にありません。地藏盆の時は、池田で花火大会があつて、それを見に行った。

青年会・処女会の仕事　青年会や処女会に仕事は、この盆踊りが主な仕事だった。お祭りには処女

会はなにもありません。青年会は、夏中、晩に相撲をした。会場はお風呂屋の上に青年会場があつて、その前で相撲をした。村の人が見に行きまんねん。また、十月の祭りの時にも、相撲をする。

昔はお客さんかて沢山来はったけど、今はもうお祭りてあらへん。

乳 お乳が出なくて、乳を借りたり乳母を頼んだりしたなどは聞いたことがない。

離乳食 離乳食については、私も乳はないほうやけど、だいぶ長い間ミルクをやっていた。こんな缶に入ったミルクを溶いて、一年位は切れてなかった。

オシメ オシメは昔は布で縫いましたよ。沢山作りました。私の子どもが出産した時には、さらの反布を買って切ったけど、私はこんな着物の古いのんでも何でも使つてオシメこしらえて、そら今と全然違いますわ。自分の着物の古いのんやら、浴衣の古いのんやらを切つてつないでしましたわ。

子守り 子守りをたのむことは聞かない。

子どもの遊び 子どもの遊びは、おてだまを縫うてな、沢山持つて遊びました。あんなんやら縄跳びをしましたは。おてだまは自分で縫うて、中にはムギの粒を入れたり、柔らかいのが好き人は米糠の糠を入れたり、中は色々入れます。色のきれいな布を合わせて作る。

肩あげ 私らの時は小さい時から、四つ身でも本身でも、着物に肩あげをして着ていた。あれは、一人前になつてからはずす。四つ身から本身になる時、肩あげを取る時に寺社に詣るとか、特に祝いをすることはない。自身の肩上げをとることと、婚姻との関係はない。

二 婚姻

結婚の相手　青年会や処女会の中で、お互いに好きになって結婚することもあったが、まあ、同じ村どうしで親がすすめて好き合うようになっていくことが多かった。今はもうえらい変わってますもんな。余所の村の人とでも、ご一緒になる人もあるし、見合いの人もあるし、色々な人は今かて一緒にでっせ。

昔は村中で結婚することが多かった。昔は、見合いで行く人は、村であんまり心安い人もないような人やわな。たいてい、好き同士になって行く人が多いわね。村の人ならなんかもよう分かってますし。今はそんなでなくて、せやけど、知らん所の人とやったら、分からんまま行ってしまふことになる。

せやさかい、今かて、村同士で行く人もありますわな。今はもう、村の中でもあの人そんな知らんかったというようなこともあるし、外へ働きに出はるさかい、村の外の人を貰ったりようしはるけど。昔は、村の中での生活が多いので、村の中で好き同士になることが多かった。

結婚の年齢　結婚する年齢は、昔も色々や、早い人もあるし、遅い人もあるしな。兵隊に行った人は、たいてい帰ってからですわな。私の兄さんの時も、兵隊から一遍帰ってからやった。

兄さんの時は、親からあの子どうや、同じ村同士やけどということ、話がすすんで貰ろうたけどな。同じ村の人やったら、ほぼ分かりますやろ。まあ、親からいわれたら、その気になりますやろな。ほいでな、昔の人はそない簡単に離婚やらせえしまへんけどな、もう、そこへ行ったら行つたままこさんならん思うて、そう思うて行く子もあるし、たいていそんなが多いですわな。今は離婚てよう

聞きますやんな、ああゆうことはあんまりありませんわな。

世話人　結婚の話は、まず世話人いう人が中に入って、女の方のな家にたのみに行つて、中に入る人があつてしまんねんけどな。世話人はどんな人になるかというのと、まあ男の方から貰いまんねんさかいな、その女の人の親戚の人をな、行つて頼んでもらうねんけどな。世話人は二人いりまんねんな、男の方の人と女の方の人と。まあ親戚の人になつてもらう。

世話人は二人して女の方の家に行き頼む。頼みに行くときに、何を持って行くとかは決つていない。その時には、どんなことをするかは、結婚式の日取りは、女の方の親が貰つてもらうということをしてからな、そんな話になるか知らんが、始めからそんなところにはいきません。

世話人を立てるといふことは、まあ話がまとまる方へ進んでいることになる。まず、女の方の家にいき、挨拶をして貰えるか頼む。女の親が、貰ってもらいますということになれば、世話人は男の方の家に行き、そのことを伝える。それが決まれば次に結婚式の日にちを決める。日にちは、どっちもの都合のよい日を選ぶ。世話人さんが色々してくれる。

結婚の日取り　日にちが決まれば、その日にちに貰うてもらふというしですわな、その時はもうなにもかも御馳走も作つて用意する。その、はじめに決めた時にかて、まあちよつとお酒を親戚の人やらで飲んでもらいますけどな。

まあ、こうこうで貰う話になつたからいうて、そういまんねんは、両方の親戚が寄つてお酒も飲んで、女の方の家でする。その場でいついつの日がええかと、決めまんねん。その時は、男の方の親や婿になる人は行かずに親戚だけが女の方の家に行く。何人というのは決つていない、そら、親戚の

多い人は多い数行きますけど。

ユイノウウ　今は、ユイノウウ金とかユイノウウ納めいいまっしやる。昔やったら、私らの時はそういうことはなかった思うね。

ナコウド　世話人さんが、ナコウドです。世話人さんは、男の人ですわな。

結婚の準備　日にちを決めたら、女の方は色々物を作らなあかんで、大変です。

作るものは、着るものやら、ダンスやら。私らの頃やったら、ダンスでも、私の時は、兄さんが運んで来てくれたくらいや思いますわ。こっちへね。ユイノウウ貰えへんけど、沢山も持ってきてきやへんし、まあダンスやら鏡台やら、整理ダンスやら洗濯もん入れるもんやら。こんなんは、自分がこっちに来る前にね、私は自分の親の家にだいぶん長い間いましたさかいな、自分が来る前に持ってきたん。普通、結婚する時に持ってくるんでしゃる、私の時は昔やし、子どもが出来てからでも一年から実家におりましたから。

結婚後の生活　結婚してからも、主人と別々におりましたけどな。ほて、子どもが生まれてからでも一年から上、向こうにおりましてん。来るのんも遅かったし、せやけど、ちよいちよい主人の家にも遊びにも来てましたな。自分の親の家は、兄さんが海軍で出ていて、人手がたりなかったから娘を出すと人手が足りないから、しばらくこちらに置ってくれということでした。

こういうことは、よくあった。私の時も、上（兄さん）が帰って来るまでよう出さんという話が出ていた。それで、主人の家に来たのは、兄さんが帰ってからになつてますねん。このことは、世話人さんが話に来たときに、そうなつていた。

結婚が決って、ダンスや鏡台を準備したが向こうの親元に置いていた。兄さんが帰ってきて、子どもも一才になった時に、その荷物をこちらの主人の家の方に持って来た。せやから、ユイノウ金も何も貰ってないと思いますわ。結婚後も、主人はこちらの家におって、お互いに行き来するということになる。

私の主人は、陸軍の兵隊やったさかい、年（ねん）が終わって帰ってたんですわ。帰ってたけども、そのままでここにおりましたん。ほで、ちょいちょい同じ村やさかい、晩でも遊びに来たりしてございました。仕事はこの家でしてました。結婚して都合三年くらいは、親元の家におりました。

イワイゴト　　日を決めて、それまでに色々準備をして、それらは主人の家で準備をして、それを嫁の家まで運んで貰う。それで、沢山村の人に飲んで貰って、そないして一応終わってましてん。そうして、イワイゴトはそうして済ましておいて、私は、自分の親元におりましたん。

イワイゴトも、世話人さんが世話をしてくれる。親戚や村の人にいっぱい来て貰って、ここらはそんなことには沢山お金入りまんねんで。

御馳走は、男の方の家で作って女の方の家に運ぶ。何時頃からというのと、夜でっけど、宵の内からな晩はおそうまでな、そういうことはしますけどな。

今みたいに三三九度の杯のようなことはせなんだけど、ただ人に飲んでもろたりな、そんなことはなかなか派手になあ、儀式ばったことは特にないが、トックリコカシとかここの言葉でいうようなこともしたが、とにかく飲み食いはなかなか派手にしまんねんな、ごつついこと、そら寿司でもな、もうお寿司の百本やそこらできかんやろ。百五十も二百も巻くんとちやいまつか。

イワイモノ　それとな、ここらは今はあんなこと知らんけどな、こんな、大きなお皿にイワイモノの二つ作りまんねんな。八十センチ位ある大きなお皿に、羊羹やら板やら、松みたいな飾りもの前にな、あれは何いうんや、お祝いの老人と老女の造り物の人形が立って、そのぐるりを細いちようどお刺身のケンのようなもので飾った。

その刺身のケンのようなん、あんな細いようなんの色の付いたん、食べたらおいしかったねえ。台を二つおいて、今はせえへんよって、私も忘れてしもたけど、ゴボウの切ったんやら、羊羹やら、こうこしらえて、ゴボウは真つ直ぐに立てたあつたけど。

こういうのを作るのには、慣れている親戚とか近所の人に手伝ってもらわないと出来ない。こんなことをしたのも、私らの時が最後やったのか、その後長いことしてない。

ムシリザカナ　そいでムシリザカナいうてな、ブリの大きなのをな、ゆがいて、竹の上のせてな、そんなをみんなに分けて食べてもらう。オテシオに箸で取ってはムシリザカナとかいうてな、みんなに食べてもらう。お祝いにそんなをしたもんや。自分がしたと違うからはつきりわからへんけどね、大きいお鍋で湯を沸かして炊いて、そこで蒸すんですわな。結婚の時の祝いにそんなことをします。

それも、何もかもみんな主人の方から持って来る。昔、夏に涼むのに使うショウウギというのがありましたわな、あんなんでも、三段でも四段でも積んでな、お魚その上にいっぱい並べて、一番上に大きなのを二つのせて、それはなかなか大層にしますねん。今はそんなんは、せえしまへんは。

そういうお皿とかの道具は、村でもどっこもがないは、ある家もない家もある。

男の人かて、お嫁さんもらう時には、お金がたくさん入りまっしやる。男の方か、女の方か、どっちが沢山入るかわからんくらい、入りましたやろなあ。女の方は、物を作って行かなあかんし。

ここでは、結婚の祝い事は、男の方の家で拵えて女の方の家に運び、そこであるのがふつうである。イワイゴトの昼　結婚のイワイゴトは女の方の家であるが、その日の昼間に、花嫁が主人の家にいっぺん挨拶に行く。仏壇にまいる。その時には、世話人が付き添うということはないが、手伝いの人かて、みんな村の知り合いの人が御馳走を作るのに出てきてくれてますからな。その時には、花嫁はそら、こぎれいなものは着てますけどな、特別に結婚式のようなものはしていかない。

せやけど、ええような着物を着て行きますけどな。花嫁は、挨拶してまた自分の家に戻る。主人は、もうみんながお酒を飲んでもらっている時にその場所に、やって来る。その日は村の人沢山に夜遅くまで飲んでもらう。

私の時は、私が住んでた家はそう広いことないから、私のおばあさんの家が八畳が四つ有るくらい広いので、そこでみんな寄ってもらってね。

あくる日はかたづけがありまっしやる。

結婚のイワイゴトの時には、家に来て貰ってふるまうので、赤飯を村に配ったり、モチを配ったりすることはありません。

世話人の礼　世話人の人には、お礼をする日といのは特に決っていない。せやけど盆やお正月には、世話人の人には、しまっけどな。初めてのお正月となお盆とな、二回はしますねん。お金やなくて品物でします。男の方の世話人と、女の方の世話人の両方に持って行く。世話人さんにお正月やお盆の

お礼する時は、男の方の家からしますやろし、女の方の家からしますねん。私の時は、そうやっ
たと思います。

とにかく、イワイゴトが大変なことです。

家計　子どもが一才の頃に、兄さんが兵隊から帰ってきて、私も自分の親の家から主人の家に移り
ました。その時には、主人の父も母も健在でした。お母さんが元気な間は、家計をまかされるとい
うことはなかったな。仕事はこっちがせんなんけどな、若いねんさかい。私らも、ひどい目におうてま
つせ。主人が兵隊に三回も四回も入ったもんねえ。帰っては行き、帰っては行きやからな。主人の二
親ともに、主人が兵隊で留守の間に亡くなってな。

冬の仕事　百姓もしてまっしゃろ、みんな肩でかついであがりました。田んぼからここまで、かつ
いであがりました。冬場に麦でも作ったら、朝の間は田んぼが氷（いて）っていてあかので、昼ま
では山に入って柴して荷のうて帰ってきて、昼からちよつと氷（いて）が溶けてから麦の田んぼ入っ
て仕事した。そんなことばかり、繰り返していた。ここらは、冬、お正月をこすと春まで、どの家
でも柴をしに行っていた。柴かて、みんな山から肩で持って帰りまんねんなあ。

伝承者　上本　清枝さん（大正6年3月4日生まれ）

第三節 居籠神事―京都府相楽郡祝園神社―

昭和五十八年、五十九年と二年続けて祝園神社の居籠神事を見学する機会を得た。

この居籠神事は「天下の奇祭」として知られ、祭りの三日間は家の出入口にムシロを吊って、戸の開閉で音のすることを遠慮するなど、強い禁忌の中に古風を色濃く残している。二日目の夜に行われる大タイムツの行列の中で、鈴の音を響かせて進む神主の荘厳な姿に神を実感するのである。

近々、京都府の無形民俗文化財の指定を受ける話があり、この古来より続く神事が将来にわたって維持される見通しが明るくなった。

本節では、精華町史編さん委員であり、また土地の長老として、この神事に造詣の深い西村久一先生から伺ったお話を、まとめて書き留めておく。神事の全般については、井上頼寿氏の『京都市民俗志』（平凡社東洋文庫）所収の報告もあわせて参照されたい。

一 祝園神社と居籠の由来

崇神天皇の時代に、十年の役という戦いがあった。それは崇神天皇と、弟のタケヤノヤスヒコという人が争ったもので、崇神天皇は川向こうの棚倉に、弟のタケヤノヤスヒコはここ祝園にいた。タケヤノヤスヒコは悪いことにすぐれていた。木津川は冬になると水が少なくなつて容易に往来が出来るので、その時に戦いがあった。特に、少し上流のゴタンバタケという所が、一番激しい戦場となつて、

たくさんの人が死んだ。それで戦いが終わってからも、毎年霊がとぶので、宮城さん(今の神主家)のずっと先代にあたる人が、奈良の春日大社にお願いに上がり、御霊(みたま)をもらい受けて来て、この祝園神社を作った。そして、居籠という祭りを始めた。この祭りは、毎年、旧暦十二月の申の日に始まるのだが、月に三回申の日がある時には、真中の、二回の時には初めの申の日の申の刻から始まり翌々日、イヌの日のイヌの刻にあける。

昔から、「サルトリ荒れて、イヌぬくい」という。居籠の時分が一番寒い季節である。

二 ムシロを吊る風習

戦前までは、駅周辺の新屋敷というあたりでも、この祭りの期間出入口の所にムシロを吊っていたが、今ではムシロという物自体がなくなっているので、その風習も神社の近くの数える程の家で見られなくなっている。

申の刻は、およそ夕方の四時なので、それまでに、その晩とあと二日食べる物を全部用意しておく。水(井戸つるべ)も二日間の分を確保しておく。このように料理や水の用意をするのは、祭りの期間中は音をたてないようにするためである。牛やニワトリを飼っている家では、よその村の家に預ける程、音をたてることを嫌うのである。

居籠の三日間は、カマドのフタに縄を十文字に掛けて音のしないようにした。神主さんのお宅では、三年程前まで、そのような様子が残っていたが、今は金属製の鍋のフタにワラを掛けるように変わった。

ている。

昔は、障子も開け閉めすると音が出てはいけないうので、クサビで止めるようなことをした。どうしても開けならん所一か所だけを残して、あとは全部そうした。玄関の戸も音をさせないように、夜昼あけはなしておいて、そこにムシロを吊った。

祭りの期間に、夜通し起きていることはない。

三 一日目の行事

一日目は、ニメートル程の小さい方のタイマツを神主が持つて、神社の境内にある井戸まで祈祷するために行く。一日目の小さなタイマツは、本殿の東側の場所で、神主が一人であいて、井戸の所へ行く。水はくまない。その場所でノリトをあげる。ノリトの内容は、昔の戦さで死んだ人の霊をなくさめるためのもの。

四 二日目の行事

タイマツ 二日目の大タイマツは、拝殿の中に置いてあるが、燃え口が、その年のアキの方になるように、毎年方向を変えてある。今年は南がアキなので、拝殿の南の方にむくようにもたせてある。

タイマツは、小さいのは神主が作る。大きなタイマツは神主とタイマツカタギ(一人)とで作る。大

きなタイマツをしぼる縄は、普通の年は十二本の輪にするが、今年はウルウ年なので十三本の輪にする。タイマツを作るのは十二月中頃のオンマツリ（春日若宮）の時である。その日は神社にサカキをあげる。

二日目の大きなタイマツは、夜八時頃、神主が本殿の火を手提げ燈籠に移し、それを拝殿に持って来て大タイマツについける。タイマツに火がつくと、上から二本目の輪（今年にはウルウ年なので三本目まで）が切れるまで、拝殿の中央に向けて燃やす。その後、タイマツを拝殿からかたぎ出して外に立て、神が出てくるのを待つ。神主は、本殿で神をむかえるノリトをあげる。

いよいよ境内の電気が消され、神が本殿から出る時、まわりの者は「モウデゴザイ」と口々に言って続けて拍手をする。また、行列が一巡し終わって、神が本殿に戻る時には「オカエリデゴザイ」という。

「×」型に組んである木槍（境内の中央）は、行列が出発する時だけはずし、そこを通り抜けるとすぐに閉め、次に帰って来た時開けて、またすぐに閉める。

大タイマツ・神主一行の行列が神社を出発してから、また神社に戻るまでの時間は、約一時間である。

昔は、神主の姿を見んように、夜店も全部電気を消していたが、ここ七、八年前から、なんぼ言うても電気をつけているので、幕をしてお姿が見えんようにした。幕の四隅を持つので四人のスケビトが必要である。農道具をかつぐ人が二人、タイマツカタギが一人、そのスケビトが六人、それに神主だから、十二、三人は最低必要な人数である。

オンダ 神社を出発した大タイマツ・神主の行列はすぐに右に折れ、村中を通り抜けてオンダの場所へと向かう。神(神主)が通る時、村人は拍手して慎む。

大タイマツは重いので、神社から十五町位まではスケビトに手伝ってもらってよいが、電車線のきわからはタイマツカタギが一人がかついでオンダの場所に行く。そこで、米などの豊作と健康を祈願する神事をする。

オンダの場所は神社の所有地で、申の日の朝の内に用意しておき、すみに砂を盛ってある。

昔は、米、麦、豆(大豆)、アズキをまいた。今は麦を除いた米、豆、アズキをまいてくる。崇神帝の時の戦争で、田も荒れて米が取れなくなったので、少しでも多く取れるようにという願いである。

まくのはタイマツカタギが行ってまく。その米、豆、アズキを混ぜた物をオンダといっている。タイマツカタギは、往きの途中までは、タイマツを持つのに手伝いに助けてもらってよいが、オンダの少し手前からは、全く一人でタイマツをかついで行き、オンダの所で、タイマツを置き、はじめ、手で砂をならし、次にカラスキ、マグワを使ってならす。オンダをまき、ノリトをあげ、一人でタイマツをかたげて皆の待つ所に行く。そこから、橋のたもとまでは助けてもらってかたげ、最後、橋の手前を南に折れてから神社までは、また一人でかたげて行く決まりになっている。

タイマツカタギは、オンダの道具として、カラスキ、マグワ(マンガ)、スキを持って行く。昔は自分でかついで行ったが、今はスケビトが二人して小さな櫃に入れてかついで行く。むこうで、タイマツカタギは、カラスキなどを使って田をならすかつこうをしてから、すでに混ぜてあるオンダをまく。その時、持って行った分を全部まくのではなく、大部分は持って帰ってくる。

オンダをする間、タイマツをそばに置いておくのが、あとかつぐ時のことを考えると、立てるよう
にしておくのが良い。

タイマツカタギが、オンダをした後、神主もオンダをまく。その時ノリトもあげる。神社の本殿の
正面に、鉛の器に入れて置いてあるオンダが、タイマツカタギと神主が持つて行く分です。他のオン
ダは、本殿の中に入れてある。

タイマツカタギも神主も、オンダは。ハラパラとまくだけで、あとは持つて帰り、タイマツカタギ
の分と神主の分とをあわせて、あとで手伝いに来ている人に配る。それを神棚に置いておき、苗代マ
ツリの時に使う。苗代をした田んぼの角に、シバ(草のある土)を置いて、そこにサツキとかサカキと
かヤマブキとか家にある花を持つて行き、一本さして、そこにオンダを置くだけのこと。豊年を祈願
する意味である。

なお、別に本殿においてあるオンダを氏子全員に配る。氏子は同様に苗代マツリに使う。ここでは、
水口マツリはしない。

オンダの場所には、この行事の後、行くことではないし、特別のことは何もない。まいたオンダは、
今ごろはエサの少ない時分なので、鳥がついばんでしまう。

タイマツカタギ 祝園は、西北、東、南、中の四つの垣内があつて、タイマツカタギは毎年交代で、
四つの垣内から順に出ることになっている。

一番が西北で、次は、東、中、南の順である。去年の係は東だったので、今年の番は中から出す。
おと年は、西北の田尻という人が勤めた。

タイマツカタギをする資格は、親戚のブク（不幸）があつた家はいけない。特定の家とか、長男、次男とかの決まりはない。大きなタイマツをかつぐし、また三日間はお宮さんで寝泊まりするので、学生は無理である。だいたい二十歳を越えた位の者がする。大勢させてくれという申し込みがあるので、集落の順に抽選になることもある。

西村さんは、十七歳の時にかついだ。

タイマツカタギは、頭に着けるハチマキがめずらしく、昔から伝わっている方法で巻くことになっている。ニメートル程の長さのサラシ布を、神主さんの奥さんが買って、よく糊をきかせて準備しておく。それを今日（二日目）西村さんのように昔から祭りに携ってきた古老が、出かけていき、まず、そのサラシ布の両端の紐結びにする所の糊を、手でもんで落とす。それから頭に巻きつけて、上とところがピンと立つようにする。

タイマツカタギは、宮さんで泊まっている間に、神主さんの分と自分の分のワラジを作る。ワラは餅米のワラが丈夫である。

社務所に泊まり込むのは、神主とタイマツカタギの二人である。

社務所にある神主さんのヒバチには、祭りの間は誰も近付かない。

社務所でよばれる物は精進もので、野菜が多い。ゴボウ、コンニャク、マメなど。二日目の夜の神事が済むと、手伝いに出た人全員に、豆腐のお汁が出される。これには、トウガラシをたくさん入れる。寒い時に外を廻ってくるので、これをよばれるとカゼをひかないという。

三年程前には、神主宅で行列から帰ったあとのカラシ汁（トウフ）を飲んでいた。

神社の門の東側に、今はないが、別棟の家があつて、そこで籠っていたのは西村さんが子供の頃のこと。六畳二間か、六畳と八畳か八畳二間か詳しくは忘れたが、畳が敷いてあつた。この籠堂のことをロクリンボウと呼んでいた。

タイマツカタギは、火を背負っているのでも早足になる。それで行列の時に神主との間の距離が開いていく。タイマツカタギは、神社に戻ると門の右手にタイマツを置き、その後、氏子全員にオンダを配る。そのオンダは向こうに持っていったのではなく、本殿に供えてあつたもので氏子の各集落の代表者に渡す。それを配るのもタイマツカタギの仕事である。

タイマツカタギの手伝いをする人は、友達などで、人数は特に決まっていない。二日目の行列が始まる時、社務所から出た所で一人ずつ神主が水で清めてくれる。そして、全員並んで、神主がノリトをあげる。

タイマツの通る道　タイマツの通る道に砂をまくのは、清めのためで、祭りに入るまでにまいておく。まく人は、村から人足として出てくれる。以前は木津川の砂を使っていたが、今は木津川からの砂の採取が禁止になっているので、山の砂を買って使っている。

昔は、入りの日の朝に木津川に砂を取りにいった。十人程で荷負うてまいて、なくなったらまた河原にいったり取ってくる。神主は行かない。オンダの砂もその時に準備する。ミのようなものでまく。

家でも、十二月三十一日の夕方に庭に砂をまく。この砂も昔は、木津川から取ったが、今では商売人から買って公民館の横に置いておくと、各戸から来て持ち帰るようになった。ミに入れて屋敷地にパツパツとまく位のことである。

行列も昔は、井戸の横を通って左に折れていたが道が悪いので今のようになった。また、オランダの場所でも、もう少し北の明神道という東西の農道を東に向かっていたが、やはり道が悪いので、今のようになった。

食事その他

三日間の食事は、前もって準備する必要があるので、たいいてい野菜もんとコウヤを入れたマキズシをしておく。私(西村さん)らの子供の時分は、三日間ホウチョウも音がするので使わないで、マキズシも前もって切っておいた。

だいたい精進のゴチソウなのだが、三日目のツナヒキが終わったら、茶碗蒸し位のこととする。二日目、三日目の朝はゾウニをする。これは正月のときと同じもので、焼いた丸モチにダイコン、コイモ、トウフを入れ、白ミソのものである。正月には三ケ日、このゾウニを食べる。

祭りの時に、火のことは特に言わない。火はかまわない。中の日(二日目)だけは、フロをたくのを遠慮するが、火を言うのではなく音をたてないという方の意味である。

西村さん宅のゴチソウは、ノリマキ、ヤマイモ、コンニャク、ゴボウ、シイタケ、コウヤ、ニンジンであった。

棚倉の方は勝った方だから何を食べても良いが、こちらは負けた方だから精神のごちそうである。

祭りの入りの前の日に、トナリ組の当番の人が、全戸の各家から取れた白米を集めてまわり、それをお宮さんに持っていく。

五 三日目の行事

三日目は午後四時に綱引きをする。竹を割って輪にする。半径三十五センチ。それを神社の鳥居の真下において、そこから神社の内側にのばした三本の太い竹に西北垣内の者、反対に神社の外側の方に、その他（東・南・中）の者とわかれて引きあう。三回やる。もし二回先に勝つとおしまい。終わると、崇神帝の弟の石塔の場所に持って行って燃やす。最初の綱引きは、西北が勝ち、他の二回は、西北が負けることになる。というのは、西北と、その他全部との綱引きなので、どうしても西北は不利なのだが、それでも不思議と一回目は西北が勝つ。

三日目のイヌの刻（七時～九時）に神主さんがタイコをたたく。これで神祭りはすべて終わる。

六、その他

この神社には記録がありません。下のコウヅヤまで流れた程の洪水があったので流されたらしい。この神社には宮座はない。この神社の創建以来ずっと続いている神主があるので、座というのは神主のいない神社には必要であるが、神主のいる神社ではその必要がない。ここの宮城さんは、あちこちの神主を兼務している。

祝園には七つのモリがあった。今の神社はハウソのモリで、他にイズモリ、ワカモリなどがあった。神社の西側には、むかし薬師寺という寺があった。それは地名が残っている。

ここには、また極楽寺という寺もあった。この寺は宮城家の寺であったが、焼かれてしまって、残っていた釣鐘を西方寺の裏の常念寺さんに譲った記録が残っている。それは元禄年間のことと、文書によると、その時、常念寺は平野大念仏寺の末となっている。

この家(西村家)の横を通っているのが郡山街道で、昔は警察や郡役所、旅館、飲み屋などが並んでいた。それが今の駅の西の道が出来てからは通行する人が少なくなった。

今、木津川の橋のある所は、昔から渡し場所であった。そこに、洪水になると流れるナガシ橋(ヒラキ橋)というものができた。今はコンクリートの立派な橋になっているが、名前はヒラキ橋のままである。

村への用水の取り入れは、もう少し上流からひいてきて、ヒラキの橋の真下でこちらに入れている。私(西村さん)の二十歳位の時には、お宮さんの所で水をわけていた。昭和十三年には、まだ、お宮さんの所で水を分けていたが、昭和十八年には木津川の堤防ができていて別に川をつけてポンプで水を取り入れるようになっていた。

第四節 六道まいるのオニ

京都のお盆は、八月八〜十日の六道参りではじまるといわれている。

平成六年の夏は、ご記憶に新しいと思うが毎日大変な暑さが続いた。特に八月八日の京都は、日中の最高気温が三九・八度にたっし、観測史上最高となったのである。この一日を「六道参りのオニ」を訪ねて東山界限を歩いてみた。

京都の市中を南北に流れる鴨川の四条大橋から南に二つ目が松原橋で、この橋の上からは夏の風物詩の料亭の床が、鴨川に迫り出して並んでいるのを見ることが出来る。これを東に渡って十分も歩けば六道の辻にいたる。

この松原通りは、道幅は三メートル程で、どうにか車がすれ違える程度である。六道参りの期間は自動車の通行を制限して、両側に夜店が並ぶ。さらに東に向かうと古来よりの京都の葬送の地であった鳥辺野の墓地、そして清水寺に連なっている。この道路がいかに重要かは、今も松原警察署が面していることでも伺える。

六道の辻の道しるべから、珍皇寺の門前に近付くと、高野槇を売る賑やかな声が聞こえてくる。境内に入るとまず右手に本尊の薬師如来を収めた収蔵庫、次に閻魔王と小野篁の大きな像をまつたお堂、そして、有名な迎え鐘があり、たえまなく鐘の音が響いている。この鐘はつくのではなく、紐を曳いて鳴らすようになっており、鐘そのものはお堂の中にあつて音色だけが響いて来るのが珍しい。

迎え鐘の奥は本堂で、格子窓を開いて机を並べ、たくさんの人が薄い板の塔婆にそれぞれの先祖の

戒名をお寺の方に書いてもらうのに余念がない。本堂前の向かって左手には線香をたくところ、地獄絵、そして小さな石地蔵がたくさん並べられた手前では、板塔婆を水にひたした高野槇で丁寧になで水手向けをする人が群がっている。

迎え鐘を打ち、水手向けをし、高野槇を家に持って帰る。これが珍皇寺における先祖迎えで、高野槇に先祖の霊がのって帰ると信じられている。

このように、六道参りで迎えられた先祖の霊は、大文字の送り火によって、またあの世に送り返されることになる。

江戸時代の京都の町を案内した『都名所図会』では、珍皇寺は次のように紹介されている。

「珍皇寺は建仁寺の南、松原通にあり（六道と号す）。本尊薬師仏は伝教大師の作にして、開基は慶俊僧都、中興は弘法大師。篁堂には小野篁の像を安置す（この所より冥土へ通ひし道なりとぞ）。焰魔堂は東の方にあり。迎鐘は七月九日・十日、参詣の人この鐘を撞いて聖霊を迎はしむるなり。六道辻（本堂の前にあり）。当寺は久代平安城の葬所なり。桓武天皇延暦十三年に長岡よりこの京にうつらせ給ふ時、この所を諸人の葬所に定め給ふ由」

江戸時代には、旧暦の七月九日と十日となっているが、現在の様子と大きな変化は見いだせない。

この珍皇寺の一带は京都の葬送の地である鳥辺野の入口にあたり、身内の者はここで遺体と別れ、奥の墓地へは葬送に携わる者しか立ち入ることが許されなかったという。つまり、六道の辻はあの世との境界であった。それ故、冥界と自由に往来出来るとされる小野篁の像がまつられるのであり、死者との決別の場であるこの六道の辻に、盆の精霊を迎える六道参りが展開されることになると考えら

れる。

さて、珍皇寺には小野篁の立像とともに閻魔王の座像がまつられていて、精霊迎えに訪れる者にはらみをきかせているように思える。閻魔王は、いうまでもなく、閻魔庁の主として死者の生前の善悪を判断し、極楽と地獄とに振り分けることで知られている。その閻魔庁を守るのがオニの役目であり、また閻魔王の命を受けて、地獄で色々な罪業を責めたてる仕事は、専らこのオニたちにまかされているのである。

珍皇寺には、そのような地獄の様子を描いた掛図があり、本堂内や小堂にかかげられているが、同じ地獄絵による絵解きを、少し西に戻った西福寺で聞くことが出来た。

西福寺は『都名所図会』にも描かれており、地藏菩薩を本尊とするお堂が松原通りに接している。珍皇寺と同様に、精霊迎えが行われており賑わいを見せていた。そのお堂の中には、六道参りの期間、幾幅もの地獄絵が掛けられており、中でも長くこの西福寺に伝わる熊野曼陀羅と地獄絵を一对としたものを絵解きされるのである。

西福寺の絵解きは、六道参りにかかすことの出来ないものであり、庶民信仰の姿をよくとどめていられると思われる。しかし、絵解きの出来る方が少なくなり、今は前のご住職お一人になってしまったと寺のお世話方から聞かされた。

大正六年生まれという前住は、益々お元気そうで背筋を伸ばし、長い棒を手にして優しい語り口で、まず向かって右手に掛けられた熊野曼陀羅からはじめられた。

この西福寺は江戸時代の中期まで熊野比丘尼が住んでいて、この曼陀羅や地獄絵の絵解きをしてい

たという。熊野曼陀羅の下部には弥勒如来の南海の浄土である補陀落へと船出する様子も描かれている。

地獄絵の説明は、専ら初七日から四十九日までの七日七日の様子が語られた。初七日は鬼が火の車を曳いて迎えに来る。二七日には三途の川を渡らねばならない。三七日には奪衣婆に衣服を剥がれる。四七日には罪の重さを計る秤に掛けられる。五七日には閻魔王の前で生前の様子が写る鏡の前に立つ。そして六七日には一週間の断食。最後の七七日は、四十九の餅を供養してもらえないと、四十九本の釘を体に打ちつけられる。

地獄絵には、恐ろしいオニが釘を打ちつける場面がリアルに描かれていた。このような、地獄の恐ろしさと共に、地藏菩薩の救済のエピソードがそえられるのである。

私が、この六道参りで出会ったオニは、地獄で存分に活躍する、さも恐ろしいオニたちであった。博物館に展示されたものではなく、夏の暑い一日、扇子の風をたよりに伺う地獄の話にこそ、このオニたちの真骨頂があるのではないかとも思わされたのである。

第五節 奥美濃の天狗伝説と宗祇柿

奥美濃に、中世からの虚空蔵信仰の拠点として名高い高賀山諸社があり、そのひとつとして知られた那比の新宮社は、郡上踊りで有名な八幡町にあたる。この新宮の地で、猿丸太夫の生家としての伝承をうけつがれる山田宏さんと十年ぶりにお会いすることができた。「ホラ吹き塾」塾長を自任される山田さんのお話は、とても楽しく聞くものの心をとらえて離さない。

新宮をふくめた高賀山周辺は伝説の宝庫ともいえるのだが、このたびは「テング」のお話を伺うことが出来た。

山田さんのご先祖にコブ権兵衛という人があった。ある日猟をして山に入っていたが、雨がふってきたので木のウツロに入っていたら、やがてそのまま眠ってしまった。

気がつくと、テングが七人でできて火をたいて踊り出した。

コブ権兵衛さんは、めっぽう踊りが好きで、またとても上手だったので、見ているうちにその踊りの輪の中へ飛び込んで一緒に踊り出した。そして「テング、テング、ななテング、おれを入れてはちテング」と唄いながら、おもしろく踊ってみせた。

天狗達はコブ権兵衛の踊りに感心し、明日の晩も、またここに来て一緒に踊れという。一度家に帰るのは許すが、かわりに何か大切なものをおいていけという。

コブ権兵衛さんが、困ってホオのコブにさわると天狗が「おお、それをおいていけ」と言って、い

とも簡単にコブを取ってくれた。コブ権兵衛さんは無事に家に戻り、再び天狗の所には行かなかったという。

この場所が、今ではテングオドリの意味からテングドリという地名になっていて、標高が六百メートル位のボコツとした山の頭の地点で、那比の山中の一番の中心にあたるのである。

テングドリに続く道には、アゼチのサコ、ワキダニ、イワヤなどという場所があり、また乞食戻りという所がある。乞食戻りは、道が一度川に入ってからなくなる場所、わざと橋をかけなかったので、乞食も「ああ、この道は水汲み道か」と思って引き返すことからつけられた。ここから奥に人を寄せ付けなかったために、そういう工夫をしたとされる。

さて、山田さんのお宅からやや北にひととき立派な柿の木が目に入るが、これが宗祇柿としてよく知られている。大変興味深いお話で新しい知見も含まれるので、重複を恐れず書きとめてみたい。

山田さんの所有にかかる宗祇柿は、樹齢四百六十年位で、樹高十八メートル、県の天然記念物に指定されている。日本で五指に入る銘木とも言われる。

さて、連歌師として著名な宗祇が、八幡城主であった東常縁から「古今伝授」を受けたことは『日本史辞典』に記されているが、その際、二人が一緒にこの地を訪れ、宗祇が歌を詠んで、古今伝授の秘法・秘伝により、渋柿を甘柿と変えたのがこの宗祇柿であると伝えられている。

柿の木の種類としては普通の山柿と同じだが、普通の山柿は渋柿であるのに、この宗祇柿は、接ぎ

木をしていないのに甘い。そして「宗祇」という柿の種の唯一の原木であり、この木から、郡上地方に広く伝えられたのである。

副論文収録の初出一覧

章 節	論文名 (原題)
1 1	「下大市 (兵庫県西宮市) の運輸・交易」 (『下大市の民俗』、文化財資料第25号、西宮市教育委員会、1982年刊)
1 2	「伊丹市荒牧の運輸・交易」 (『荒牧郷土史』荒牧史編纂委員会編、伊丹市立博物館、1995年刊)
1 3	「三田市山田の運輸・交易」 (『市史研究さんだ』創刊号、三田市市史編纂専門委員会編、三田市、1999年刊)
2 1	「越水 (兵庫県西宮市) の年中行事」 (『西宮の年中行事』、西宮市文化財調査報告書第3集、西宮市教育委員会、1978年刊)
2 2	「遠州御前崎の年中行事一澤入由次翁覚書」 (『御影通信』第39号、御影史学研究会、1983年刊)
3 1	「大河原 (滋賀県甲賀郡土山町) の生業」 (『大河原民俗調査報告書』、関西大学Ⅱ部民俗学研究会、1979年刊)
3 2	「細河の生育・婚姻」 (『古江の歴史と民俗』、『古江の歴史と民俗』編集委員会編、池田市教育委員会、1992年刊)
3 3	「居籠神事一京都府相楽郡祝園神社一」 (『御影通信』第40号、御影史学研究会、1984年刊)
3 4	「六道参りのオニ」 (『歴史読本特別増刊』第40巻第2号、日本の「鬼」総覧、新人物往来社、1995年刊)
3 5	「奥美濃の天狗伝説と宗祇柿」 (『御影通信』第49号、御影史学研究会、1993年刊)

あとがき

副論文として、筆者が携わった地域調査の報告から、幾編かを選んで載せたのが本冊である。

振り返ると、実にたくさんの方からお話を聞かせていただいたことを思い出す。筆者の研究に何らかの意味があるとすれば、それは多くの方から教えをいただいた知識が、価値をもっていたということになると思える。

今後も、初心にかえり、フィールドを大切にする心を心にとめて、研究を続けたいと考えている。